
死からの蘇生

ソンミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死からの蘇生

【Nコード】

N3148K

【作者名】

ソンミン

【あらすじ】

京都の某マンモス病院を舞台に、新人研修医鶴見の苦悩と彼の魂の蘇生を綴った物語である。

ブローグ

ブローグ

鶴見賢治はいつもの散歩に出た。紅葉のシーズンにはまだ早い。それでも十月の京都の東山界隈は歩くだけでも、東方に連なる山々の景色が目にも心地よかった。

勤務開始が六月であつたからもう働いて四ヶ月になる。本来ならようやく仕事にも慣れて仕事の面白さが分かつてくる時期のはずだつた。

しかし鶴見は違つた。仕事を楽しいと思うこともなく過ごす毎日。さらには仲間からも孤立して、職場でも完全に周囲から浮いた存在となつていた。

原因はいろいろあつたわけだが……。

「まあ、成りたくないものになつちやつたというのが一番の原因かな……」

鶴見は自嘲的につぶやいた。

今はお昼の休みを利用しての外出である。このところ、昼食はいつも一人で取るようになった。最初は職場の食堂で一人で食べていたが、何かしら落ち着かなかつた。周囲の視線が気になった。皆が自分を注視しているように感じた。ひそひそ声が聞こえると、自分の噂ではないかと勘ぐつた。

こんなことが続いて、彼は昼食を職場の食堂で取るのを止めた。次に選んだのは職場の屋上であつたが、そこも実際に行ってみると、落ち着かなかつた。

さてどうしたものか？

幸い、鶴見の職場は京都の東山に位置し、職場の東側は歩けばすぐに東福寺、また北側は五分も歩けば泉湧寺にたどり着くという立地条件であつた。さらに、東福寺についてはその境内が出入り自由

であつたので、彼はお昼休みになると散歩がてらそこまで行つて、境内で昼食を取ることとしたのであつた。

「しかし皮肉なもんだ」

東福寺の三門を正面に見据えることの出来る、講堂の回廊の東廊下が彼のお気に入り場所だつた。

講堂は石作りの土台の上に立っていて、その石の土台がそのまま講堂をぐるりと取り巻く回廊になっているのである。観光客が何人かその回廊を歩いている。

そこにいつものように腰掛けると、彼はパツクに入ったコーヒ―を飲みながら思った。

「京都が好きで、あこがれて、俺は京都の大学を受験した。そして見事に京都に住むと言つ夢を果たした。それなのに……」

彼はうつむくと宙に放り出した足をばたばたとさせた。遣りようの無い無力感から来るいらつきであつた。

続いて手を上げて、大きく背伸びをすると目の前の三門を見据えた。

「ま、でも、大好きな東福寺に毎日散歩に来られるだけで満足とすべきか？」

以前ならそう考えることで、彼は背負わされた重荷が少し軽くなるのを感じた。いや、というより正確に言えば、それが目的でこの三門の前に座るのであつた。

高校生の頃、京都に憧れた……。

歴史、寺社仏閣が好きな彼にとって京都に住むのは人生の目的の样でもあつた。

「あの時初志貫徹で文学部に進むべきだつた」
悔やんでも後の祭りだつた。

高校生時代、彼の夢は中国および日本の古典文学の研究者となることであつた。多くの歴史資料が山積みにされた部屋で、一日を過ごす……。そんな日々を過ごしていれば、目の前の三門もまた違つた意味を持つて鶴見の目に映つたであろう。いろんなことを彼に問

にかけてきたであろう。

お前はなぜ今そこに座っている？

鎌倉時代に遡る歴史を持つ、この三門の問いかけに彼は答えられないでいた。以前は自分を癒してくれたこの三門ですら、今はこうして厳しく自分を責め立ててくるのだ。

問いかけに答えられない毎日……。

苦悩の日々……。

「あの三門の楼閣から飛び降りたらいつそ楽だろうか？」

そんな思いが脳裏を一瞬かすめた。

鶴見はしかしすぐに頭をぶるぶるつと振るわせると、自身に言い聞かせた。

「いや、まだまだ頑張ってみないと！」

三門は長き歴史の風雪にも耐えて、力強く聳え立っている。鶴見は自分も同じように強く立ち上がらねば、と決意を新たにした。

気を取り直すと、鶴見はいいやと回廊から地面に飛び降りようとした。

と、その時であつた……。

「あの、お写真お願いできません？」

前方からの女性の声に、鶴見ははつと頭を上げた。

見ると、目の前に三十歳前後と思われる女性が立っている。カメラを手にしてにやかな表情で彼女はさらに鶴見に近づいてきた。

「よろしいですか？あの三門をバックに……」

笑顔でカメラを差し出す女性の願いを拒否する理由も無い。

鶴見は講堂の回廊から、砂利が敷き詰められている地面に、えいやと飛び降りた。

「いいですよ」

有名な観光地でもあるし、写真を頼まれるのは珍しくはない。今までにも何回も見知らぬ観光客から写真を頼まれては撮ってきた。

「じゃあ、これがシャッターですから……」

女性が真横まで来て、カメラの説明をし出した。間近で見ると、

女性の笑顔がなぜかひどく眩しく感じられて、彼は一瞬眩暈感を覚えた。

この季節には不似合いとも言える青色のワンピースを身にまとい、足元も同じ青のハイヒールで決めていた。

決して美人と言うわけでない。薄めの眉であるが、目鼻立はしつかりしている。真つ赤な口紅に色取られた唇が青の服装と対照的で、見た目の彼女の派手さをさらに強調していた。

ただ、ふくよかな顔立ちに加え、体つき全体も比較的ぼつちやりとしていて、それが彼女の愛嬌のある笑顔とあいまって、見た目の派手さとは違い、近づくととても親近感、また安堵感を感じさせられた。さらに、澄んだ瞳はどこまでも黒く、そのまま体ごと引き込まれてしまいそうな錯覚感すら覚えた。

鶴見は、大人の女性の魅力を存分に漂わせる、そんな彼女に思わず見とれてしまったが、彼女の

「どうかなさいましたか？」

という声に、ふと我に返ると、

「じゃあ、撮りますから……」

と言つて、彼女と共に三門に向かった。

女性は三門を背景にすると、すぐにポーズを撮った。鶴見はカメラを構えた。カメラのファインダーの向こうで彼女はこれ以上は無いという笑顔を振りまいている。それは決して自分個人に向けられたものではないと理解はしているが、鶴見には、それが彼女からの励ましの暗黙の言葉のようにも見えて、落ち込んでいた気分が少し軽くなるのを感じた。

「はい、それではチーズ！」

鶴見は三門を背景に彼女の写真を撮った。中学生時代は写真部であつた。構図は完璧だ。

写真を撮り終わると鶴見は女性に近づいた。

「じゃあ、カメラ返します」

「ありがとうございました」

女性はカメラを仕舞いつつ、鶴見に礼を述べた。

「それじゃあ」

鶴見は軽く会釈をすると、女性に別れを告げた。会話を続けようと思えば出来なくもなかったが、元来口下手の彼にはそれ以上彼女と会話を続けるのは実際苦痛でもあった。それに、そろそろ職場に帰らねばならない。

彼は三門を背にすると、日下門へ向かった。

しかし……。昼からの仕事のことを考えると足取りがまた重くなつた。

鶴見は先ほどの、ファインダー越しに自分に向けられた彼女の笑顔を思い出した。

本当に輝くような笑顔だった

そう思うと、鶴見はもう一度彼女の姿を見たいと思い、日下門の手前で三門の方を振り返った。しかし境内をぐるりと見回してみたが、もはや境内に彼女の姿は見えなかった。

「まあ、しかし一期一会だから」

残念な気持ちになると、彼は再び憂鬱な気分に見まれた。そして前にもまして重く感じられる足を引きずると、職場へと向かった。

日下門をくぐり境内を出て、土塀の道を通る。そして臥雲橋……。

いつもの道を通り、東福寺の駐車場のあたりまで来ると西の方角、民家の屋根の彼方に彼の職場の建物が一部垣間見えてくる。

「さあ、まあ、がんばって行くしかないか！」

その鶴見の視線の先にあったのは古いビルの屋上の給水塔であった。

そしてその給水塔の側面には大きい赤い十字のマークがある。

そう彼の職場は病床六百を越える、京都の人なら誰しもその存在を知る、由緒ある某マンモス病院である。

そして新人の研修医として、鶴見はそこに勤務していたのであった。

新人研修医の苦悩

新人研修医の苦悩

新人研修医が実際仕事を始めるのは六月からである。国家試験の発表が五月末なのでそうなるのだが、最初の三カ月は文字通り死に物狂いの状態で、果たして自分がこの仕事に向いているのか、どうなのか、鶴見にはそんなことを考える余裕すら無かった。

彼はその三カ月を一応無難にはこなした。特に大きい失敗も無かった。三カ月の間に必要最低限の外科的知識、また救急知識も訓練され、九月からは週に一度、先輩医師と共にではあるが夜間の救急外来も担当させられていた。鶴見はそれも無難にこなしていた。いやむしろ無難以上だったかもしれない。特に彼は手先が器用だったこともあって、手技的な面では先輩医師から褒められることも多かった。

彼は某国立大学医学部出身で、在学中の成績はほぼすべてが”秀”、また医師国家試験の正解率は約90%と、誰もが認める秀才であつた。

しかし……。

今、その三ヶ月間が終わって彼は仕事に対する遣り甲斐を感じられない自分に苛立ちを覚えていた。

「こんなはずではなかった」

やりがいを感じられないだけならまだ良かった。

彼は研修医の仲間の中にあつて、大きいコンプレックスを感じていた。

それは何か？頭脳明晰であり、優秀な成績で大学を卒業した医師として、華々しい活躍をしているはずの彼がなぜ劣等感に苛まれるのか？

その答えは、彼と一日病院にいれば自ずと判明する……。

早速病棟での彼の一日を見てみよう。

午前中朝一番で新人研修医たちは病棟の回診に出向く。病棟看護師詰め所でカルテをチェックした後、他の研修医仲間共々、同時に回診に出向くわけである。

受け持ち患者が一人当たり四・五人が平均なのだが、この回診に午前の時間を全部使ってしまう研修医も多い。一人当たり三十分程度ということになるうか。無論これには遅い、早いがあり、早いから優秀、遅いから劣等生というわけでは決してない。所見を取るのに困難な患者もいるし、急性期で入院して重症度が高い患者はそれなりに時間がかかる。

ただ、そんな事情を全部割り引いても。鶴見が回診にける時間は極端に短いのである。そう、雲の子を散らすように病棟に散っていく研修医の中で、決まって一番最初に詰め所に戻ってくるのが鶴見であった。

「先生今日も一番だね」

と看護師から言われるのは決して鶴見を褒めているのではない。『あなた、しっかりと患者を見てるの？本当に』という皮肉が込められているのである。

では、なぜ鶴見はいつも一番で回診を終わってしまうのか？
何故か？それは一言で言えば、彼は回診が嫌いだったからである。
得意でなかったというのがより正確な言い方かもしれないが…

…。

もつと言えば、鶴見には患者と接する方法が分からなかったのである。

努力はした。しかし……。

患者のベッドサイドで時間を過ごすことが嫌いな自分を変革させることはどうしても出来なかったのであった。

たとえば、ある研修医は一人の患者の診察に三十分、場合によれば一時間もかけたりする。手が痺れるという訴えがあれば、神経学的検査のための七つ道具を携えて延々と患者のベッドサイドで所見を取ったりする。鶴見にはそんな芸当が出来なかったのである。

それはなぜか？

大学で学んだ医学は論理が通っていて明快だった。この病気ならこういう症状、逆にこういう症状ならこの病気……。

しかし、実際の臨床の現場ではこの論理が通用しないことがあまりにも多かった。鶴見は戸惑った。通用しなければいけないほど、彼は教科書を紐解いた。論文を読んだ。努力はしたのである。

ただその努力の仕方が間違っていたということであろう。

臨床の場合では、医学の教科書的論理が通用しない場合、答えは教科書に求めるのではなく、患者にこそその答えを求めるべきなのである。

なぜ矛盾するのだ？教科書通りでないのだ？という答えを患者の所見に求めるべきなのである。

だから、所見は詳細に取るべきであるし、必要ならたとえ同じことでも何度も何度も繰り返し返すべきである。丁度、犯罪の鑑識捜査に例える事が出来よう。

地味な努力こそが 필요한のだ。

それは鶴見も頭では分かっているのだが……。

ところが実際に患者の下へ足を運ぶと、そこに長くいられないのである。所見を取り出すと早くその場から立ち去りたいという衝動に駆られる。

患者がもしこう言って鶴見を引き止めたとしよう。

「先生、しんどいんです」

すると鶴見はこう言って、足早に患者の元を立ち去るのだ。

「でも、検査結果では何も異常ありません」

鶴見と受け持ち患者の会話はいつもこれで終わってしまう。

他の多くの研修医たちは、そこから話を続けて行くこうとするのが常だ。

検査結果では異常がないのに、やはりしんどいと患者が訴えるのは何かどこかに異常が潜んでいないか？

そう考えて、さらに詳細に話を聞いたり、所見を詳細に取ったり

するわけである。

俺は医者にそもそも向いていなかったのではないか？

鶴見はいつしかそう考えるようになった。そしてそんな気持ちが心に一旦芽生えたと、さらにその気持ちが膨らんでいつて、いつしか鶴見の心をほぼ埋め尽くしてしまった。

果てにはこう考えるようになった。

そもそも医学部に進学したことが間違いの元だったのでは？
そこまで考えが至ると、後は悪循環となった。鶴見は仕事そのものの情熱をどんどん失っていった。

しかし、さすがにこんなことではいけないと、自分の今後をどうするか自問自答の日々を送っていたのが、今の鶴見の姿であった。彼は決して投げやりになつたわけではない。

即ち、彼なりに逃げ道を考えてはいた。彼はこの病院での研修が終わつたら、大学へ戻つて基礎医学へ進むか、放射線科へ進むことをほぼ決意していたのである。

そこなら人と接する必要が無い！

人と接することさえ無ければ、あの学生時代のように優秀な自分に戻るはずだ！彼はそう考えたのである。

唯一それを心の励みにして、彼は今の辛い現状を何とか持ちこたえていたのである。

臨時当直

臨時当直

十月ももう終わろうかというある日、鶴見は新しい患者を持たされた。72歳の老人、呼吸不全で炭酸ガス蓄積があり、意識状態が悪い。呼びかけにはかろうじて応じるがすぐにうとうとし始める。応急の処置として、低流量の酸素吸入をまず開始した。無論炭酸ガス濃度をチェックしながらであるが……。するとある程度老人の意識は回復し始めた。

ところが、そうなるとなったでまた問題が起こった。 大声で喚き始めたのだ。

「殺せ！ わしは生きている資格などない！ すぐに殺せ！ 殺してくれ！」

そして体をばたばたとさせて暴れるのである。結構厳しい状況だ。何とかおとなしくさせようと鎮静剤を打つと、今度は呼吸抑制が起きる。

まるで墜落寸前に機首を上下させる飛行機のようにである。

「これは気管挿管がすぐにも必要かも」

鶴見は厄介なことになった、と思いつつ、悪戦苦闘を続けた。それでも試行錯誤の末、ようやく、適当な酸素投与量が決まり、老人の状態も安定して、何とか興奮もおさまった。無論、傾眠状態は続いており、落ち着いたといっても、超低空飛行から抜け出させたわけではなかったが……。

鶴見は指導医とカンファレンスを持った。そしてその結果、しばらくはこのまま様子を見ようということになった。何よりも、まず呼吸不全のきつかけとなった肺炎の治療を優先させ、それでも呼吸不全が改善しなければ、最終的に気管挿管をしようということで、指導医と合意した。

「何とか挿管は免れたか……」

鶴見は一通りの指示を何とか終えると、椅子に座って足を投げ出した。気管挿管ともなれば、その後人工呼吸器の設定など、大変な作業が必要となる。何日かは家に帰れないだろう。何とかそれは免れた……。彼はふーっと大きいため息をつくと天井を眺めた。今は病状が安定したので、その気になれば家に帰ることも出来た。彼は病院のすぐ近くのアパートに一人で暮らしていたので、呼び出しがあればいつでも駆けつけられる。

今日は、でも病院に泊るとするか！

鶴見は病院に泊ることを決めた。別に深い意味はない。

ただ新人研修医は重症の患者を受け持った際は病院に二十四時間張り付いているべし、という不文律があった。暗黙の了承であった。最初の三カ月はみなこれを守っていた。俺は二週間家に帰らなかった、とかそんな自慢話が研修医仲間ではよく交わされていた。ただ最近ではこの不文律を守らない研修医も時に出てきている。

根がまじめな鶴見は比較的よくこの不文律を守っていた。

泊まろうと決めると、次に寝る場所の確保が必要であった。ただ正式な業務当直でないので当直室が使えない。こんな場合は医局で寝泊りするものが多かったが、鶴見は一人を好んだ。

ではどうするか？

病院には使われていない部屋が結構あったので、そこから空いている部屋を探すのである。探すのは看護師が手伝ってくれる。

まずは特別個室だ。病院内では『特室』と略して呼ぶ。風呂もトイレも専用のものが付いている。一流ホテルとまではいかないが、そこそこのビジネスホテル並みの設備である。しかし、これは人気があるので、鶴見の前にすでに同じような境遇の研修医からの先約があつて埋まっていた。

こんな場合、次に探すのは病院内の空き部屋である。

こういった臨時当直用にと、今までの先輩たちが空のベッドを運んできたりして備え付けてある部屋があちこちにあるのだ。

しかし鶴見にとっては今日は不運であった。それらの部屋を思い

つくまま全部当たったがどれも予約済みだった。

「間の悪いときもあるもんだ。病院嫌いのこの俺様がわざわざ泊まってあげましよう、って決めたらこの様だ。やはり帰るとするか……」

鶴見があきらめて、帰りかけようとしていた時だ。看護師の一人が電話を切ると彼に声をかけた。

「先生、部屋がありましたよ。地下の検査室の顕微鏡室です。そこにベッドがあるのでOKってことです。検査室の許可をもらいました。鍵は検査室にありますから取りに来てくださって」

鶴見はそれを聞くと、ほっとしたようながっかりしたような気分であつたが、

「ありがとう。それじゃあ、何かあつたらポケベル鳴らして」と言い残して病棟を去った。

「なるほど、あの部屋があつたか」

まったく思いつかなかったが、確かにベッドが据えてある。広さも寝るだけならちょうどいい加減だ。

しかし、考えてみると顕微鏡室だけではない。検査室関連で言えば、臨時当直のための部屋としてなら使えそうな部屋が他にも考えてみればたくさんある。

鶴見には、むしろ今まで使ったことが無いのが不思議に思えた。

何故だろう？

思い当たることが一つあつた。それは……。

検査部は、病院内にあつて比較的閉鎖的な部門としてこの病院では有名であつた。

かつて鶴見が当直していたときの話である。

夜間に腹痛で来た患者の尿の顕微鏡検査を検査当直に依頼したことがある。

このとき帰ってきた返事を今も鶴見は忘れない。それは、

「鶴見Dr、申し訳ありませんが、顕微鏡検査は、私どもの当直業務の中に含まれておりませんのでいたしかねます。ご自分でされて

ください」

というものだった。啞然として言葉を失ったのを覚えている。ある先輩から聞いた話では、組合が強いかそんな体質なのだ、ということであつたが……。

まあ、事の真偽はともかく、そんな閉鎖的な部門だから、なかなか検査室管理の部屋を部外者には使わせたくないのだろう。

「でも、よく空けてくれたな。まあ、ともかくありがたく使わせてもらつとするか」

その顕微鏡室へは勤務中何度か足を運んでいる。

「疲れた、とにかく早く寝るとしよう」

鶴見は医局へ一旦立ち寄つて必要なものをそろえた後、顕微鏡室へ向かつた。

顕微鏡室は地下にある。病院の建物自身が古いので照明も暗く、地下は夜になるとほとんど人もいないので何とも不気味な雰囲気が漂う。

「まあ、でも今の俺にぴつたりの雰囲気だな」

昼間ならまだまだだが、こうして夜歩くと、人氣も無く、まるで廃墟の中を歩いているような錯覚すら覚える。

鶴見は顕微鏡室へ向かいながら、以前に受け持った患者の一人から冗談交じりに、こんな苦情を聞かされたことを思い出した。

「先生、この病院どうでもええけど古すぎるわ。こんなところで入院してたら、治る病氣も治らへんで」

鶴見はそれを聞いて、苦笑いをするしかなかった。

確かに古い。そろそろ建て替えを検討すべき時なのだが、色々と事情があるらしい。

組合が強いために就業規則が本社からの資金援助基準を満たさないとか、人件費がどうやらとか、移転を考えているが、土地がないだ……。

鶴見にはそれらのことは、ある意味まあ、どうでもいいことだったが、確かにこの病院に入院した患者は氣の毒だと、今廃墟にも似

て見えるこの廊下を歩きながら鶴見はあらためて感じるのであった。

「これじゃあ、お化けが出てきたって不思議じゃないよ、まったく」

鶴見はそんなものを信じる性格ではなかったが、この病院で今までに亡くなった患者の魂が、今この場を彷徨っていると言われれば、何となく信じてしまいそうな、そんな夜の地下廊下の光景であった。廊下のほぼつきあたりまで来た。

「確かここだったはずだが……」

暗いので昼間とまた雰囲気が違う。さらに廊下の奥とあって、照明がさらに暗く、鶴見は目を凝らしてようやく部屋のプレートを確認した。

「あつた、あつた」

部屋に入ると、一瞬冷気に体を包まれた。不気味な感じだった。すぐに照明をつけた。何とも寒々とした殺風景な部屋の光景が目飛び込んできた。

「まあ、本当、今の俺にぴったりの睡眠場所かな？」

鶴見は自虐的な思いに耽りながら早々とその夜は床に就いた。

悪夢

悪夢

それは実にひどい悪夢だった。

その夜……。

鶴見は疲れていたのですぐに眠れると思いきや、なかなか寝付けないので苛立った。元来、鶴見自身は寝る場所を選ばないタイプだ。どこでもいつでも眠れるのが自慢だ。

それなのに……。

なかなか眠れない。寝返りばかり打っていた。寝ていると妙に苦しくなる。窒息しそうな感覚に襲われる。こんなことは今までになかったことだ。

それでも最後には鶴見は何とかようやく眠りにつくことが出来た。心地よい入眠感……。

そして、暫しのまどろみの後、そのまま彼は眠りの世界に引き込まれた。

さて、彼が睡眠についてからどれぐらいの時間が経過したであろうか？ 気が付くと彼は夢の世界を彷徨っていた。

鶴見は普段は滅多に夢を見ない。それなのにその夜はいやなくらい鮮明な夢であった。あまりの夢の鮮明さに夢の中で鶴見は自分の頬を思い切り抓ったほどである。それがあまりに痛かったのでこれは夢ではないと夢の中で信じたほどだ。

この夢が現実か、はたまた現実と誤っているこの世界は実は夢の世界か？

そんな哲学的疑問を時に自らに問いながら、鶴見は夢とも現実とも、もはや自分でも定めをつけかねる世界を彷徨った。

取り留めの無い状況が次から次へと現れては消えて行った。しかしそれはそれで心地よかった。天に昇る気持ちとはこういう気分をいうのであろうか？

夢なら覚めないでほしい……。鶴見はそう願ったほどだ。

さて、そうこう彷徨っているうちに、気が付くと、いつしか鶴見は東福寺にいた。するとどうだろう。先日東福寺で出会ったあの女性が現れた。あの時と同じ服装、そして同じ笑顔だった。

「あつ」

と思う間もなく、気が付くと、彼女と鶴見は東福寺から泉涌寺へと向かう道を連れ立って歩いている。とてもうきうきした気分で鶴見はあまりの心地よさから、ふわっと天に舞い上がり、続いて彼女と手に手をとって空中遊泳を始めた。

すごい快感だった。

その快感がしばらく続いた後だった。すごい突風に見舞われた。

「落ちる！」

何とか彼女と二人で踏ん張った。しかし風の力には勝てなかった。彼は彼女もろとも地上に落とされた。見ると彼女も地面に倒れている。頭を強く打ったようだ。頭から血を流している。

「大丈夫か！」

と助け起こして彼女の顔を見つめた鶴見は驚愕のあまり言葉を失った。

「……！」

なんと彼女の顔が狐に化けているのである。しかも血だらけだ。

「これは一体！」

と思う間もなく、その狐は目を閉じた死に顔から一転、恐ろしい形相に変化し、牙をむくと鶴見に襲い掛かってきた。鶴見に食いかからんと、飛び掛ると彼を押さえ込んだ。

「何をする！」

狐が鶴見の首を絞め始めた。鶴見は何とかその手を振り解こうと必死にもがくのだが、体全体が金縛り状態になり思うようにならない。

息苦しい！

俺はこのまま死ぬのか？

鶴見は最後の力を振り絞って狐の手を振りほどいた。と、次の瞬間彼はどさっという音と共にベッドの下に転がり落ちていた。

「……」

すべてが夢だと分かったのはその時だった。

鶴見は呆然と床の上に座ったまま、深呼吸をして気を落ち着けた。

「夢か……」

正気に返ると鶴見はベッドの上に座りなおした。見ると、下着が汗びっしょりである。

「本当に殺されるかと思った……」

こんな恐ろしい夢の体験は初めてだった。恐ろしさの余韻で、鶴見は体を震わせていた。そしてそのまま呆然とベッドの上で座り続けた。

「何時だろう……」

見ると時計は三時半を指していた。何度か深呼吸をすると、少し気分が落ち着いていた。そこで鶴見は再び布団をかぶって眠りに就こうとしたが、目を閉じるとあの恐ろしい狐の顔が思い出され、結局一睡も出来ない。

そのまま布団に包まれて悶々としていると、電話が鳴った。

「先生、南病棟四階です。ちょっと来てもらえませんか。患者さんの容態が悪いんです」

「うん、わかった」

そう返事をする、鶴見は早速着替え始めた。ある意味電話に救われた。

どうせ、こんなんじゃ眠れっこない

得体の知れない恐怖感を何とか振り払うと、彼は気持ちを切り替え、顕微鏡室を後にした。

部屋の外に出ると、外の廊下はほの暗い照明があるばかりで、薄暗く、不吉な夢の後に歩くには少々勇気が必要だった。

鶴見はまたひとつ深呼吸をして気持ちを落ち着けると、急ぎ足で廊下を抜け、病棟へと向かうべく階段を駆け上がった。

ゆらめく影

ゆらめく影

普段ならどうということのない、いつも上り下りする階段であったが、先ほどの夢があまりに強烈であったので、そんな階段の踊り場で、体をひねって向きを変えようとする時ですら、その先に何かありはしないかと不安な気持ちに襲われ、不気味に思えた。さらに追い討ちをかけられるように、実際気温も低くはあったが、歩いていると何故か、背筋がぞつとする感覚に何度も襲われる。

「まったく、もう……」

鶴見は得体の知れない恐怖感に襲われている自分が情けなくもあり、そんな自分を叱咤激励すると、足早に階段を駆け上がり、一気に一階に出た。

一階は照明も少し明るくて鶴見は救われた気がした。それに人通りも多少ある。鶴見はようやくほっと一安心すると、

「まあ、ともかく急いで病棟へ向かおう」

と次々と階段を駆け上がった。いった。

途中三階まで来ると、彼はトイレに立ち寄ることにした。職位専用トイレがそこに設置されていたからである。

トイレに入って用を足しながらも、さっきの不思議な夢を思い出すと、また思わず身震いが走った。すると普段使い慣れたこのトイレも何か急に不気味な存在に思えて、彼は用を足すとさっさとここを出ようと、急いで洗面台に向かった。

そして手を洗って、顔を上げたその瞬間であった。

「うん？」

鶴見は一瞬自分の目を疑った。

自分が映し出された鏡の奥、即ち自分の姿の背後に何かがゆらゆらと動いているのが見える。いや正確に言うと背後に見えるものがゆがんで見えている、と言ったほうが正しいだろうか。そのゆがみ

がゆらゆらと揺れるように変化して動くのである。

鶴見は目の錯覚かと思い、手で目を擦ったが、やはりそのゆれは止まらない。ゆらゆらとゆれるその有様は、目に見えない何かの物体が空中で遊泳しているようにも見えた。

「あれは？」

と、目を凝らして、そのゆらめきを鏡の中で目で追ったが、ある所でそのゆらめきは突然消えて無くなった。鶴見はそこで後ろを振り返って見たが、もはや何のゆがみも認められない……。彼の視界はまったく正常に戻っていた。

「……」

今一度前を振り返って、鏡を覗き込んでみたが、見えるものはすべて正常で、鏡も特に壊れているとか、汚れているようでもなかった。

「気のせいかな？」

鶴見は、先ほどの恐ろしい夢がまだ脳裏にこびり付いているところに加えて、さらに今新たにこの不可解なゆらめく影を見たものだから、恐怖心がまたもや大きく募ってきた。そこで、

「さーて、行くか！」

と、この恐怖心を追い払うため、彼はわざと大きく声を上げると、足早にトイレを立ち去り、病棟へ急いだ。

急ぎ足で病棟へ向かいながら、彼は過去に同じような体験をしたことをふと思い出していた。

それは彼が大学生の時であった。

友人が殆どいなかった彼は一匹の迷い猫を飼っていたが、その猫が死んだ時のことである。

猫が息を引き取った当日である。猫の遺体を抱きしめながら、彼は悲しみに打ちひしがれていた。彼は元来動物好きでもあったし、その猫は孤独感を紛らわしてくれた良き友でもあったから当然であった。

すると、突然彼は視界のゆらめきを感じた。目の前を浮遊するか

のようにそのゆらめきは空中を移動しながら窓の外へ消えた。

彼は猫にも魂があるのか、とその時感じたのを今でも忘れない。ただ、そんなことを誰かに話すわけでもなし、元来非科学的なことは否定してきた彼であつたので、そういう記憶は彼の頭の中でも封印されてきたわけである。

「多分、目の錯覚だ」

そう自分に言い聞かせてきた。

実はそれ以外にも非科学的体験はあつた。それは高校生の頃である。彼は道を歩いていると良く、いわば”存在感の無い”人間とすれ違うことを経験していた。

それは表現するに難しい。明らかに人間の姿形をしているのだが、人間らしい生きた存在感を感じないのである。

そして、すれ違った後、後ろを振り返るともはやその人の姿は見えないのである。

それ以前にそんな経験をしたこともなく、また、大学に入ってからそんな体験をすることも無くなったので、彼はそんな体験も、”非科学的”なものとして頭の中に封印していたのであつた。

それが、今封印を解かれてしまった。

彼はそんな一連の自分の体験を思い起こすと、漠然とした不安感に苛まれた。

「自分がさっき見たものはひょっとして……」

と、そこまで考えると、彼はそんな考えを拒否すべく、ぶるぶると頭を振るわせた。

しかし、医師たる自分は合理主義者であるべきだ！非科学的なことは考えるまい！

彼はそう改めて心に言い聞かせると、再びそれらの記憶を頭の片隅に封印した。

「馬鹿げたことを考えちゃいけない！」

そう、改めて自分に言い聞かせると、力強い足取りで、詰め所へ急ぐべく、階段を一步一步上っていった。

老人の見たもの

老人が見たもの

病棟に到着すると、詰め所で看護婦が待ち構えていた。暗がりから、照明が明るく照らされた詰め所に入って、漸く鶴見は不安から解放された。さらにもって看護婦の白い白衣が、夜の照明の中、彼の目に眩しく映えて飛び込んできた。

確かに白衣の天使とはその通りだ。

その後姿に一瞬だが鶴見は見とれてしまった。何とも不安な時間を過ごした彼にとって、まさにその後姿は天使に見えたのも無理はない。そして声をかけるのも忘れてそこに立ちすくんでいた。

すると看護婦が気配を感じて振り返った。その看護婦は、鶴見の姿を確認すると、顔に笑みを浮かべてはしゃぎだした。

「やった、鶴見先生だ！鶴見先生だ！」

喜ぶ彼女を尻目に鶴見は我に返ると、安堵の表情から一転、次には浮かぬ顔となった。

「岩見君か……」

鶴見はまずいことになったと思った。

実は彼女が鶴見に好意を寄せているのは病棟でも有名だった。ただ鶴見自身がまったく彼女に関心を寄せていなかったことに加え、病棟で時間をつぶすことがきらいだったから、彼女と今まで個人的に話をしたりする機会はほとんどなかった。

しかし岩見はそんなことはお構いなしで、鶴見が病棟に姿を見せると、いつもこのようにはしゃいで出迎えるのである。元来人嫌いの鶴見にとって、この彼女のオーバーアクションは実に苦手で悩みの種であった。

このような彼女と、どのように接していいかさっぱり分からなかったからである。

岩見はいつものとおり、そんな鶴見の心情など気にかけるでもな

く、にこにこしながら鶴見に近づいてきた。

「先生、今日入院の患者、また暴れだして、興奮して、もうどうにもならないんです」

岩見は、それでも浮かれっぱなしというわけでもなく、てきぱきと今の状況を説明しだした。

仕事はしつかり、的確にする。鶴見もそういう印象を彼女には持っていた。

「興奮？またか……」

鶴見は、にこやかに話しかけてくる岩見の顔を見ながら、こうしてみると普段はやかましく感じる岩見の話し方が、今は、先ほどまでの一連の不思議な体験によって彼が感じている恐れ感情を、忘れさせてくれる癒しの効果を持っているのに気づいた。

患者もきつと同じように感じるのだろう。彼はそう思うと、看護婦の存在感、役割の大きさを改めて再認識した。

所詮、医師は白衣の天使にはなれない、まして自分は……。そんなことを考え始めると、鶴見は一瞬上の空の状態になった。岩見はすぐにそれに気付いた。

「先生、聞いてます？どうかしました？」

岩見の声に、はっと我に返ると、鶴見は慌てて彼女に質問した。

「いや、何……。で、興奮って、具体的にどんな……」

岩見は鶴見の返事に怪訝そうな表情を見せながらも、それに答えて言った。

「ええ、叫びだしたり、暴れたりなんです……。点滴チューブは引き抜くわ、もう大変なんです」

「要するに、入院した時と同じかい？殺せ、殺せか？」

「うーん、まあそんなところですかね」

岩見の返事を聞くと、鶴見は、厄介なことになったなと、大きくため息をついた。

「そうか、ともかくまずは見に行くとするか……」

彼はそう言うのと岩見と共に病室に向かった。

夜の病室は暗い。そして観察室の中はさらに暗い……。それは、無論、物理的にも暗いという意味であるが、それだけを言ってるのではない。病室内の一種独特の異様な光景、雰囲気でもある。

心電図のモニターの単調な機械音、暗がりには光る様々な機械のデジタル表示、点滴ボトルから一滴一滴液が落ちては、チューブの中に吸い込まれていくその様……。耳を澄ませばその音すら聞こえてきそうな何とも言えない不気味な静寂……。

そこに楽しい要素はこれっぽちもない。

そんな中で患者は病氣と闘わねばならない。

ある意味負けて当然かも？　鶴見はふとそう考えた。

すべてが暗いのだ。そして希望すらも暗く失われていくのだ。今、鶴見の目の前にある部屋も、ドアは開けっ放しで中は見通せる。殺伐とした光景である。こんなところに入れられたら自分も絶望するだろうか？　鶴見は珍しくそんなことを考えながら病室の中に入ってしまった。正直、そんな感傷を抱いて患者を診たことは今まで一度だって無かった。自分でも不思議だった。

先ほどの夢、トイレでの出来事、さらに封印から解かれた過去の不思議な体験、これら一連のことが鶴見の心に何らかの変化を引き起こしていたのは間違いないかった。

「失礼しますよ……」

鶴見は儀礼的にそう言うベッドサイドに近づいた。七十二歳の老人は、炭酸ガスの蓄積がある程度取れてきたのであろう。鶴見の呼びかけに応じて少し体を動かした。鶴見はさらに顔を近づけると老人に話しかけた。

「どうしました？」

鶴見の呼びかけに、老人は「うーん」とうなり声をあげると、続いて目を開けた。そして、目の前に鶴見がいるのを確認すると、彼をじっとにらみ始めた。

「どうしました？」

鶴見は老人にもう一度問うた。すると、それまで黙って鶴見を睨

んでいただけの老人が、急に顔面をゆがめた。恐怖に満ち満ちた、そのゆがんだ表情は、それを見ている鶴見が逆に恐れおののくほどであった。その場が一瞬ではあるが凍りついたように感じられた……。鶴見も次に何を言うべきか分からず、言葉を詰まらせてしまった。

と、次の瞬間であつた。

老人はかつと目を見開くと、続けて大声で叫びだした。

「助けてくれ!!」

そして体を激しくばたばたと動かし始めた。老人の暴れる様を見て鶴見も我に返った。老人は点滴チューブを引き抜こうともがいている。

「暴れないで!」

鶴見は老人を押さえ込んだ。岩見もそれに加わった。

「大丈夫ですよ!落ち着いてください!」

岩見も一緒になって、必死に宥めるが、老人はまったく言うことを聞かない。大変な恐怖心なのか、怯えて暴れるばかりである。

鶴見は混乱していた。何事か起こったのか、また今起こっているのかさっぱり理解が出来なかった。それでも老人を抑えこみながら、医師として頭の中のコンピューターをフル稼働させた。

この興奮の原因は何だ?鶴見しつかりしろ!冷静になれ!

しかし興奮する原因がさっぱり分からない。呼吸不全で炭酸ガスが蓄積している状態であれば、ある程度不穏状態が出現しても頷けた。しかし、老人の場合検査データは改善している……。なぜだ?

「これは鎮静剤打つしかないな……」

鶴見は、老人を押さえ込みながら、岩見に、

「とにかくセルシン1アンプル行こう」

と、鎮静剤注射を口頭で指示した。

「先生、呼吸に来ません(注:鎮静剤注射により呼吸を抑制すること。最悪の場合呼吸停止を来すこともある)?」

岩見のこの問いにも、

「どうしようもないだろ、これじゃあ。やるしか」

と、鶴見は岩見に再度注射を指示した。

他の当直看護婦があわただしく動き始める。鶴見と岩見だけでは押さえ込むのに力が足りない。まさに火事場の馬鹿力とも言つべき老人の暴れようであった。さらに二、三人の応援を得て老人を押さえ込むと、一人が鎮静剤の注射をした。

「何をする！あいつが、あいつが！」

注射を打つのに老人は激しく抵抗した。それでもさすがに鎮静剤の効果か、老人は注射を打たれると、しばらくして後おとなしくなった。案じられた呼吸状態の悪化も見られず、眠ったようである。バイタルサインも安定している。

鶴見はそれを確認すると、ふーっとため息をついた。

「まいったな……」

岩見もそれに頷いた。二人は詰め所に戻った。

「何か悪い夢でも見たんだろうか？」

鶴見の問いかけに、岩見が返事をしようとしたところに別の患者からナースコールがあった。

「はい、すぐ行きます！」

岩見はあわただしく詰め所を後にした。他の看護婦たちも出払っている。鶴見は一人詰め所に取り残された。

「まあ、いつもこうして俺は孤独ってわけだ……」

鶴見は一人つぶやくと、カルテの記入を始めた。そうこうしているうちに五時になった。眠たくはあったが、あの恐ろしい顕微鏡室に戻る気は起こらなかった。彼はそのまま椅子にもたれかかると大きいあくびをした。すると突然睡魔が襲ってきて、椅子で眠ったまま朝を迎えた。

ある噂

ある噂

「先生起きてください！」

看護婦岩見の元気のいい声に鶴見は目を覚ました。

目の前にコーヒーが置いてある。いい香りだ。気がつくと、背中に毛布がかけられている。

「先生、昨夜はご苦労様でした。今日は外来あるんじゃないんですか？医局へ戻らないと」

「そうだな……」

時計を見ると八時だ。ただ今日は外来当番ではない。

「もう少しゆつくりするよ。今日は外来じゃないんで」

鶴見がそう言うと、岩見は「しめた」と言わんばかりの顔で、ちゃんと鶴見の前に座った。

「先生、珍しいね。詰め所で寝ちゃうなんて！風邪引くといけないと思って私、毛布かけてあげたんだ！でも、こんなこと初めてじゃない？詰め所でゆつくりくつろぐ先生って今まで見たことないね。何かありました？先生？」

と、彼女は鶴見に畳み掛けるように問いかけてくる。いつもこんな調子で一方的に親しげな言葉で話しかけてくるのであったが、鶴見はそれを止めてくれとも言えず、黙って苦笑いをしながら聞いているのが常であった。

そもそもが彼女は詰め所でもあけっぴろげで、明るい性格の子として有名であった。

決して美人とは言えないが、ぽっちゃり顔で愛嬌が良く、いつもにこにこしていた。賢いと言うよりは努力家で、患者に優しく、患者の間では評判が良かった。

ただ詰め所では控えめな位置にいつも甘んじていた。その理由は彼女が准看護婦であったことである。

なぜそれが？

鶴見の勤めていた病院は、半ば公的（公立に順ずる）病院であり、そういった病院の悪しき慣習として、准看護婦は、たとえば詰め所のリーダーにはなれないなど、冷遇されていたのである。無論そういう法律があるわけではない。まったく悪しき慣習というべき以外の何者でもない、鶴見はこうした病院の保守的な頑なな姿勢にもかねてから反感を抱いていた。

そんな環境であつたから准看護婦の多くは職場環境に嫌気がさしたり、人間関係がうまくいかなかったり、また仕事に情熱が持てずに途中退職するものも多かった。また、それに耐えながらも仕事を継続出来る者は者で、半ば仕事を義務的にこなしはするものの、情熱を傾けるといふ姿勢には程遠かった。

そんなぎくしゃくした職場環境の中で、彼女は常に笑顔を絶やさず、患者の看護に献身的に奉仕していた。

そして鶴見と接するときの彼女は、さらに笑顔を増し、明るさを増すのである。

鶴見は鶴見で、自分が彼女に好意を持たれているというのは分かつていても、彼自身が職場に拒否反応を示しているような状況で、病棟に長居することがあまり無かつたし、元来が話しべたでもあつた。そんな訳で、岩見と会話することも滅多に無かつた。

つまり二人の関係は恋愛感情を持つ持たない以前の問題と言えた。それが今、彼女が目の前にどーんと腰をすえて、これ以上は振りまけませんと言わんばかりの微笑を浮かべながら、自分を見つめている。

しかも彼の背中には彼女のかけてくれた毛布があつた。彼女の優しい思いやりにはじーんと胸を打つものがあつた。

さらに昨晚詰め所で見ただけの彼女の眩しい後姿……。その姿に白衣の天使を思わず想像した鶴見は、今まで気にも留めなかつた彼女の存在が、一晩で大きく自分の心のうちで膨らんで、すっかり自分を占拠しかねない状態であることに気づいて、うろたえると同時に恥ず

かしい思いであつた。

しかし、社交性にかける鶴見は、そんな思いを言葉にする術を知らず、また、感謝の気持ちを伝えようにもその言葉がなかなか見つけ出せずにいた。

さてどう会話を続けたものか？

彼の心は混乱の窮みにあつた。

しかし、そんな鶴見の心境には岩見は無頓着であつた。彼女は一方的に話を続けた。

「先生にあだ名教えてあげようか？」

「あだ名？」

岩見の突然の話題変更に鶴見はさらにうろたえた。自分にどんなあだ名がついているというのだ？

何だろうとまじめに頭をひねって考えていると、岩見が「へへへ」と笑つてこう言つた。

「眠り狂四郎！格好いいでしょう、私がつけたんだ。ね、格好いいでしょう。だって、先生、さつとやってきて、さつと指示出して、さつと詰め所を去っていくでしょ。眠り狂四郎そのものじゃない？結構私は格好いいと思つてんだけど……」

と、鶴見の昨晚からの不思議な体験と、そのためなのか彼を襲つている何か不思議な心境の変化など知ろうはずもなく、一方的に話しかけてくる。

「眠り狂四郎ね……」

鶴見は思わず苦笑いをした。今時眠り狂四郎なんて若い世代の人には何のことか分かるまい。

「岩見君って。そんなこと言つてると年がばれるよ」

鶴見は岩見の話術にはまって次第に愉快的気持ちになつてくる自分が不思議だつた。久しくこのような楽しい会話を味わつていなかった。4月から仕事を始めて以後、そもそも「楽しい」ということそのものから遠ざかつていた。

それが、今彼女と会話していて楽しい気分を味わつていた。とて

も不思議な感覚だった。

彼は明るい彼女の話し方に、何か心が洗われるような気がして、
どんどん彼女の話術にはまっていた。

「先生、私、幸せ！こんなゆっくり先生と話し出来たの本当初めて
だもの！」

と、しばらく、こんな調子で、文字通り、きゃっきゃきゃっきゃ
とはしゃぎながら、岩見は取るに足らない話題を面白おかしく提供
していたが……。

ある所で、彼女は突然話を一旦打ち切ると、何かを思い出すかの
ように天井を見上げた。

そして、今度は今までと違う真剣な表情を鶴見に向けると、彼に
再び語りかけた。

「先生、おもしろい話聞かせてあげようか？」

声も真剣である。

彼女の話術にはまってしまった鶴見は、彼女の一転した真面目な
話しぶりにさらに興味を感じた。そこで、

「何、それ？」

と、聞き返した。すると彼女はおもむろに口を開くと、

「また、出たんですよ。あれが！」

と、鶴見に言った。

「あれ、って何？」

鶴見は何のことか分からず反射的に聞き返した。

すると、岩見は先ほどまでの真顔から表情を急に和らげると、

「あれですよ、あれ！」

と、今度はおどけた話し方で、鶴見に話しかけてくる。

「だから、あれって何だよ」

鶴見にはさっぱり理解できなくなった。岩見は、鶴見が本当に「あれ」
の正体を知らないのをここで悟った。そこで、

「あ、先生知らなかったんだ……」

と言うと、今度は鶴見の横に来て座りなおした。そして鶴見の耳

元でささやいた。

「死神ですよ！」

「死神!？」

鶴見は呆然とした。

「死神!？」

立ち上がると思わずもう一度その言葉を繰り返した。

彼の脳裏に、昨日の夢のこと、また続いてトイレでの出来事のこと
とが次々と浮かび上がってきた。

「……」

鶴見は言葉を失った。昨晚の一連の体験の記憶が今度はぐるぐると頭の中で回り始めた。

岩見は、そんな鶴見の反応が予想外だったのか、ぽかんとした表情で鶴見を見ていた。

「死神って？それどういうこと？」

ようやく冷静さを取り戻した鶴見は、椅子に再び腰掛けると岩見に質問した。

真顔で話しかけてくる鶴見の反応に戸惑いを感じつつも、岩見は質問に答えてこう言った。

「先生、本当知らないんだね。この病棟では有名ですよ。いや病院全部かな？先生、私たちとゆっくり話したりすることが殆ど無いから何も知らなかったんだね」

鶴見は黙って聞いていた。岩見はさらに続けた。

「この病棟で『あれが出た』って言ったら、それは死神のことですよ……。ほら昨日の老人いるでしょ。あの人、今日、朝行ったらね、いきなり私をつかまえてこう言うんですよ……」

鶴見はただ聞いているしかなかったが、続いて発せられた岩見の言葉に再び体が凍りついた。

「この部屋に死神が出た、ってね」

ここまで話を聞くに至って、鶴見は昨晚自分の身に降りかかった一連の出来事の謎が、何かパズルが解けたように解明されたような

気持ちになった。が、次の瞬間、ぶるぶると頭を振るわせた。

かりそめにも自分は医学を勉強した科学者である！

「そんな馬鹿な！」

興奮して鶴見は思わず声を荒げてしまった。

岩見はそんな鶴見の態度に困惑して体が竦んでしまい、黙り込んだまま彼を見ているしかなかった。それでも自分が、鶴見を怒らせてしまったのか？と思うと、悲しくなつて、神妙な顔つきで謝罪を始めた。

「先生、大丈夫。私、いきなり怖い話しちゃったかしら……。先生つて、意外と怖がり屋さんだった？ごめんね！」

そんな彼女の思いをよそに、鶴見は茫然自失のままだった。

彼は暫く無言のままでもいたが、気分がさらに悪くなつてめまいを感じるにいたり、

「医局へ帰るよ……」

と言うと、椅子から立ち上がった。

「先生、本当ごめんね……。ごめんなさいね」

岩見は岩見で、好きな人を怒らせてしまった、大変なことをしかしてしまった、と後悔の念で胸を詰まらせながら、鶴見の立ち去るのを見送った。

死神伝説

死神伝説

医局へ戻ってから鶴見は茫然自失の状態だった。頭の中は混乱の極みにあつて、考えれば考えるほど訳が分からなくなつた。それは彼の体の中に、話の真偽を確かめる二人の自分がいたからである。一人は医学を学んだ、科学者としての自分。

もう一人は、悪夢にうなされ、続いてトイレで不思議な影を目撃した自分である。

前者から見れば、死神なんて！まったくきわめて馬鹿な話であつた。

しかし、後者はそうでない。自らの過去の体験と突き合わせて考えてみると、実につじつまの合う話として受け入れられる。

鶴見は、岩見の「また出たんですよ」という言葉を何度も思い起こしていた。

「また、つて。じゃあ、前にも出ていたのか？」

彼は混乱した頭を静めるために何かいい方法はないかとしばらく思索すると、

「図書室に行こう」

と決断し、医局をあとにした。

図書室は彼が病院の中で最も好きなお気に入りの場所であつた。

彼は図書室にいると心が安らいだのである。鶴見は、患者よりも、人間よりも、本が好きだった、ということであろうか。

そこには年配の女性の司書さんがいた。彼は部屋への出入りも頻繁であつたからこの人とは気安かつた。

図書室に入ると、彼は彼女に挨拶をした。

「あの、ちょっと聞きたいんですけど……」

と切り出すと、彼は、朝、岩見から聞いた話をそのまま彼女に伝えた。ただし、自分の昨晚の体験のことは伏せておいた。よりによ

って超常現象など信じてはいけなはずの、その当の医者が、そんな不思議な体験をした、などという話は、できれば伏せておきたかったのである。

年配の司書であるから、病院の歴史にも詳しいと分かっている尋ねたのもあった。彼女なら何か知っているに違いないと。

その読みはあたった。

「ふーん……」

と言つて、一呼吸置くと彼女は語り始めた。

「死神伝説、有名ですよ。病院伝説って言うんですかね。先生は知らなかったんだ」

「そうですか……」

結局、その手のゴシップめいた話は、病棟に長くいて、詰め所でも看護婦と長く喋ったり、としていく中で雑談として話題に登場してくるものだ。

鶴見はいつも用事が終わるとさっさと詰め所を後にして、看護婦とその手の話題に参加した記憶がない。病棟にいるのが苦痛でもあったし、そもそも誰と誰がいい仲だとか、その手の話はまったく関心もなかった。だから、さらにはそんな病院伝説と言うべきか、この手の話を聞いたことが無かったとしてある意味当然とも言えた……。

どこか神妙な顔つきの鶴見に向かって、司書はさらに語り続けた。「この手の話はどこの病院にでもあるものですよ……。まあ一種の都市伝説に近いかな」

彼女の話の要点はこうである。

重症患者は大体決まって、看護婦詰め所の隣の部屋に移される。

そこは観察室と呼ばれ、詰め所からは一枚の大きいガラスの窓を通してその部屋の状態が見渡せる。

そこへ移動させられるということは、患者にとって自分が重症であることを知らされたこともある。そこそこ意識のある患者であれば、ある意味死期が迫っていることを知らされたも同然で、かな

りパニック状態になることがある。突然暴れたり、喚いたり、点滴チューブを引き抜いたり、等等。

こういう状態は、医学的にはせん妄と言って、ひどい例では突然精神錯乱状態になることもある。

そういうせん妄状態となった患者が、おそらく自分が死神に襲われているという幻覚をみているのではないか？ 合理的に説明しようとする、そういう説明が最も説得力にあふれている。

あるいは、そういう重症患者には脳に幻覚をもたらす様な副作用のある薬が投与されていることも多い。そんな薬を投与された患者が幻覚を見ているのではないか？

彼女はそうに解釈していると言う。

「だって、先生おかしいでしょう。この二十世紀の世の中に死神だなんて！」

「……」

鶴見は黙っているしかなかった。
なるほど、と頷ける話である。

しかし昨晚の夢のことまで聞いてみるつもりはなかった。司書の話がかなり合理的でもあったので、彼は既に科学者としての自分を取り戻していた。

そうさ、あの変な夢も、そして今朝のあの老人の死神目撃談も、偶然妙なことが続いただけで、何の因果関係もない。そう、これはたまたま、ある日の夜、そういう出来事があったというだけさ。鶴見はそう自分に言い聞かせると、医局へ戻ることにした。

「ありがとうございます。つまらない話で時間をつぶして」と言うと、鶴見は図書室を出ようと司書に背を向けた。

その背後から司書は彼に声をかけた。
「いいんですよ、そんな……。あ、鶴見Dr、ついですから、どうですか、もう一つ、この病院には面白い伝説が最近広まっているんですよ！」

しかし、鶴見は司書の言葉に反応して立ち止まることも無く、歩

を早めるとそのまま部屋を出た。それは、一時とは言え、不吉な夢と不吉な老人の目撃談に恐怖を覚えた自分を恥じる気持ちもあって、これ以上そんな都市伝説の類の話に耳を傾けることが恥ずかしく感じられたからであった。

一方、部屋に残された司書は不満げな表情で、一人こう呟いた。「せっかく、面白い話なのにね。こっちのほうが断然ね……。狐のタタリ伝説、これって死神よりもよっぽど怖いし、当病院オリジナルですからね……。あーあ、鶴見先生、これを聞かないで行っちゃうなんて……」

図書室から遠く離れてすでに階段を降り始めた鶴見の耳に、無論この彼女の呟きが届いているはずはなかったが……。

再び東福寺へ

再び東福寺へ

そんな不思議な体験をした夜から、しばらくしてのことである。すでに十一月も半ばを過ぎていた。

ぼちぼちと紅葉が色づき始めてきて、気の早い観光客がすでに団体バスで京都に押しかけてきていた。

東福寺の紅葉は、洛北の紅葉よりも少し遅い。年によっても違いますが十一月下旬あたりが見ごろである。

そんなある日、鶴見は夕方少し時間が空いたので、東福寺に行くことを決心した。

夕刻の東福寺を訪れたかったのである。そこでの夕刻の紅葉の景色が鶴見のお気に入りであったからだ。

その時間には人が少ないことも鶴見の気に入っていた。ところが……。

色づき始めた紅葉を臥雲橋から眺めることを楽しみにして行っただのに、そこはすでに黒山の人だかりであった。

「何とまあ、風情のないことか……」

鶴見はぼやいたが仕様がなかった。

彼が学生のころは、こんなことはなかった。ここ東福寺はまだまだ、京都の穴場的寺院の一つであった。そんな東福寺が好きで彼はよくここを訪れた。

それが、最近の京都観光ブームで「誰も知らない京都」といった類の本なり、テレビ番組などでこの東福寺も良く紹介されるようになり、気がつくところ「誰でも知っている京都」の寺になってしまっていた。

拳句の果てに連日の観光客攻勢である。

臥雲橋へ向かう途中に塔頭寺院の土塀が続く石畳の道がある。彼が昔訪れた頃はその土塀を眺めるだけで癒されたものであった。

それが今やどうだ。その土塀はありとあらゆる種類のいたずら書きの被害に会い、半ば美しい壁の表面が崩れ落ちている。

恐らく清少納言が生きていてこの有様を見たら、「いとわろし」と嘆いたであろう。

紅葉の最盛期になると、東大路通りから九条通りまで、路上に觀光バスが何台も駐車する。寺に駐車スペースがないからである。ひどい時は鴨川にかかる九条大橋までバスの駐車場となってしまう。「市電が走っていたあの頃の京都がよかった……」

鶴見はやむなく、休日の銀座の混雑並みとも言えるこの臥雲橋の賑わいを横目を通りすぎると、日下門を通り、そのまま境内に入った。そして、いつものお気に入りの場所にどっかりと座ると、三門を見据えた。

やはりここだけが唯一彼がゆっくり出来る場所であつた。反対側の通天橋への入り口はやはり黒山の人ばかりであつたが、こちら側はひっそりとしている。

歴史の風雪に耐えてきたこの三門……。眺めるだけで癒される。不思議だつた。

鶴見は京都の寺院に数多くある三門の中でもとりわけこの三門を愛していた。

南禅寺のはやや威圧的な感がある。建仁寺のは清楚さに欠ける。知恩院のはわざとらしい。黒谷さんはいいのだが人を受け入れすぎ

る。

それらに比べ、ここ東福寺の三門は、まったく隙が無かつた。ぱつと見は重厚だが、よく見ると実に清楚である。相手を跳ね除ける威圧感があつて、同時にどんな人の視線も優しく受け止めてくれる母のような暖かさがある。眺めていれば、まさに美しい音楽が三門全体から奏でられているようである。というかその存在そのものが美しいメロディーのようである。和音と言つてもいいのかもしれない。

座つて眺めていると、鶴見はいつものようにすっかり見とれてし

まった。

「さて君はどう考えているのかな？ 昨今のこの京都の変貌振りを」
そしていつものように彼は三門に語りかけた。

とその時であった……。

「私は今の京都が好き！ 先生がいるからね」

背後からの突然の声に鶴見は驚いた。

「君は……」

そこに看護婦の岩見がいた。私服なので一瞬誰か見分けが付かなかったのである。しかし、愛嬌のある笑顔ですぐに彼女と分かった。
「驚かれました！ 鶴見Drファンクラブの代表、岩見ですよ。はい先生、これ差し入れ！」

啞然とする鶴見を横目に、彼女は持っていた袋を鶴見に渡すと、そのまましゃべり続けた。

「先生、パン好きでしょ。だから買ってきてあげた。何せ、私、ファンクラブ代表だから、先生のことちゃんと調べてあるんだ。まあ、ファンクラブって言っても今のところメンバーって私だけかな？ なんかやって、ははは」

屈託のない彼女の笑いに、鶴見も気を許した。

「どうして、ここが分かったの？」

鶴見の問いにはすぐに答えず、彼女は彼の横に腰を下ろした。そして、いつに無く神妙な面持ちになると、鶴見と同様三門の方を向いたまま語り始めた。

「私もこのお寺好きなんです。私、金沢の出身ですよ。京都はお寺が多くて金沢に似ている。お寺に来ると故郷を思い出すんです……」

珍しく、しみじみと話す彼女の横顔を見て、鶴見も言葉を挟まず黙って聞いていた。

「でもどこも人が一杯でしょう。ここはまだ人が少ないから、時々来るんです。でも私ら看護婦は先生と違って、昼間はなかなか来れないでしょう。私は夜勤明けとかだとそのまま寮に行って寝ちゃうし、日勤の後だと疲れて、やっぱり帰っちゃうし……」

鶴見は黙ったままだった。今まで抱いていた印象と違うそんな岩見の真摯な態度、物言いに鶴見は何か心打たれるものを感じていた。そんな鶴見に向かって岩見はさらに話を続けた。

「そしたら、いつだったかな。私、休みの日にここへ来たら先生を見ちゃったんです。あ、先生、昼休みは病院にいないと思ったらここに來てるんだ、ってその時知ったんです」

「そうか……」

鶴見もしみじみとした口調で返答した。

岩見は話を続けた。

「私、同僚と今日の準夜（準夜勤のこと）の仕事変わったんです。で、早めに病院へ来たら、先生が丁度、病院から出てくるところで、東福寺の方へ歩いていくのが見えたから、パン買って後をつけてきたんです」

と、そこまで言うと、岩見は急に真面目な表情になった。そして、鶴見の顔を見据えて、こう言った。

「先生、この前、ごめんなさいね。私、死神なんて変な話題出して、先生気分悪くしたみたいだから……」

そして言い終わると、鶴見に向かってぺこりと頭を下げた。

鶴見は、いきなり頭をさげられてどうしていいものかどぎまぎした。しかし、いずれにしてもこの彼女の真面目な態度、また誠実な心に大きく心動かされた。

「いや、全然気にしてないよ。そんな……。気分を悪くしたんじゃないくて……」

と、そこまで言うと、そこで話を止めた。

いや、実は怪しげな狐の夢を見たので、その夢と死神の話が重なってパニックになったんだ。　そんな話をしてどうなるう。

そんな話題をするより、このまま彼女と座っていたかった。

人嫌いで通っている鶴見にとってはここ暫く体験したことのない、不思議な気持ちだった。遡れば、こんな気持ちは初恋以来だろうか？　どうしてだろう？　彼女が横に座っていることが、今ままでと違い

苦痛にならなかった。

どうしてだろう？ あれだけ人を避けてきた自分が、どうして？

話を中断した鶴見は、そんな思いにとらわれて、黙って岩見の横顔を見ていた。岩見は自分がじっと見つめられているのを感じると、恥ずかしくて顔を少し赤らめた。そして俯いて黙ったままだった。

鶴見はそんな岩見の傍らにいて、なぜか平安な気持ちに満たされた自分を不思議に思いながらも、前を向くとそのまま三門の方を見やってやはり黙っていた。

二人は揃って山門を見やりながら、しばらく肩を並べて座り続けた。

曇りがちだった天気が、急にほんのり明るくなってきたかと思うと、夕焼けの光に美しく三門が照らされて、赤い輝きを放った。鶴見の目にそれは、東山の紅葉の景色に勝るとも劣らない美しさを感じられた。そして、それはまるで、三門までが二人の仲睦まじい様子に顔を赤らめたようにも見えた。

看護記録の謎

看護記録の謎

例の呼吸不全の老人の容態がまた悪化した。

しかも今回は検査数値があまりにも悪く、鶴見の指導医はカンファレンスで気管切開治療を鶴見に指示した。

「さて、さてこれはまたしばらく泊り込みだな……」

鶴見は覚悟した。気管切開を患者に施した経験は一回ある。術前、術後のいろんな処置、指示を考えると家には簡単に帰れそうに無いことは覚悟していた。

気管切開そのものは無事に成功した。外科の先生に立ち会ってもらって鶴見が自ら処置を施した。

「君は手先が器用だな」

と、外科の先生にほめられた。手先の器用さはいつも褒められる、ある意味少ない鶴見の自慢の一つであった。

やはり自分は基礎医学に進んでネズミを相手に実験しているのがお似合いなのかな？

鶴見は改めてそんなことを感じていた。

さて、無事に気管切開術が成功して、老人の状態も少し持ち直し、鶴見が病院で寝泊りしてすでに三日が過ぎていた。鶴見は幸い先日の顕微鏡室でのいやな悪夢もすっかり忘れていたし、今回は特別個室で寝ることが出来たので、まあ、快適とは言えずとも、当直疲れはそんなにひどくなかった。

ただ三日目ともなるとさすがにアパートが恋しくなる。

「あー、今日は帰れるかな……」

気管切開後四日目の朝を迎えて、病棟にいた鶴見は必要な指示を書き終わるとため息混じりにそう呟いた。

最初の二晩はまあまあ眠れたのだが、実は昨晚は深夜に呼び出されている。幸い容態は急変することなく落ち着いたが、鶴見はそろ

そろ寝慣れた自分の布団でぐっすりと睡眠を取りたい衝動に駆られた。

よし今日はいったんアパートへ帰ろう！

そう決意すると、彼は最後にカルテの記載を確認した。するとある部分で早速疑問が生じた。

「うん？」

容態の変化についての記載であった。

「時間が合わないぞ……」

自らの記載に疑問を感じた彼は、確認のため看護記録を読んだ。

「えーっと」

と、看護記録を読んでいた彼だったが、ある行でその目が止まった。

「これは！」

カルテを持っていた彼の手が震えた。顔から血の気が引いていくのが自分でも分かった。

「先生、どうかしましたか？ 顔色が悪いですよ」

ただならぬ鶴見の表情の変化に驚いた看護師の一人が声をかけた。はっと我に返った鶴見は、

「いや、大丈夫、ありがとう」

とだけ言っと、カルテの記載所見確認作業も投げ出して、すぐにそのまま病棟を後にした。

「どうしたのかしら、先生、カルテも片付けないで……」

看護師はカルテを閉じてカルテ棚に戻した。彼女が見送る鶴見の後姿は彼女の目に力無く映った。それは、まるで亡霊がさ迷っているようにも見えた。

伝説の解明

伝説の解明

鶴見は医局に戻ると自分の机に向かった。そして目を瞑ると先ほど見た看護記録の一文を何度も思い起こしていた。

看護記録にはこう記してあったのである。

「……鶴見Dr診察後、しばらくの後、患者意識回復するも興奮状態、突如『あいつがやって来た！』『あいつだ！死神だ！』と叫びだす。落ち着くように諭すも効果なし。鶴見Drに再度診察要請を考えたが、すぐに傾眠状態となり、興奮状態は治まる。バイタルも安定しているのでそのまま朝まで様子を見る……」

鶴見にはまことにショックな内容だったことは言うまでも無い。

せつかく忘れかけていた悪夢が呼び起こされた！　しばらくそうして悶々としていたが、鶴見は急に立ち上がると意を決して図書室へ向かった。

「こうなったらとことんやってやる！」

鶴見はある決意を胸に秘めて、図書室へ向かう階段を上っていった。

死神の正体を突き止めてやる　鶴見の決意であった。

彼は勢い良く図書室に入ると、例の司書に頼んだ。

「すいません、カルテを見たいんです。この4月からの死亡症例を全部……」

まずは死亡症例のカルテに手がかりを求めたのである。図書室は診療録の保管もしていた。

顔見知りの司書は、突然のこの鶴見の要請に怪訝な顔をしたが、
「何か調べ物ですか」

と聞くだけで、カルテを出し始めた。

「でも、多いですよ。まずは4月分だけね……。先生、それでも多

いわ。内科分だけにしましょうか？」

「そうして下さい」

鶴見は出されたカルテの山を抱えると、奥の机に向かった。まさか死神の正体突き止めるためですとは言えない。

さあ勝負だ！

鶴見はカルテの調査を始めた。全部を見る必要は無い。重要なのは看護記録の最後の部分である。そこに死神の患者目撃談があれば看護師による記載があるかもしれない。

午前中は無駄に終わった。

退屈な作業であった。昼前になるとさすがに睡魔が襲ってきた。それでも何とか四月分は目を通した。

まあ、気長にやるしかあるまい！

固く心にそう誓うと、とりあえず鶴見は今日は家に帰ることにした。

そして、その次の日から……。

鶴見の図書室通いが続いた。病棟回診をそっちのけで図書室に通い詰める鶴見を一部の人は不審に思ったが、

「まあ、あいつはそういう奴さ」

と、彼が抱えている悩みのことなど知ろうはずもなかった。

そして何日が過ぎたろうか……。

ある日、鶴見の驚嘆した声が図書室に上がった。

「あつた！」

そう、看護師による患者の死神目撃談の記録である。

そしてその記録には次のように記載されていた。

「……深夜、ナースコルから叫び声が聞こえる。あわてて駆けつけると患者が興奮状態にあり。点滴チューブを引き抜きながら、『死神が来た！死神が来た！』と叫んでいる。落ち着くように促す。幸い病棟当直Drが回診中であつたので指示をもらう。セルシン（注：抗不安剤）1A筋注にてようやく治まる……」

最初はその発見に興奮した鶴見だったが、カルテを閉じると、そ

の表紙にある患者氏名が目に入った。すると次の瞬間、わなわなと体が震えだした。その患者の名前を記憶している自分に気が付いたのだ。要するにそれは自分が主治医の患者だったのだ！

次々とカルテを開いていく作業であつたので、あまりに単調になりすぎて、ここところ看護記録の部分ばかり開いていた。そのため患者の名前に気が付かなかったのだ。

「何てこつた……」

その患者の名前はすっかり覚えていて。自分の受け持ち患者であつたのは間違いない。

鶴見にはショックだつた。

まさか？すると自分の患者が死神に狙われているのか？

と、そこまで考えを飛躍させた鶴見だが、すぐに科学者としての自分を取り戻すと、こう自分に言い聞かせた。

「何を馬鹿なことをお前は考えているのだ！」

鶴見はすぐに科学的分析にとりかかった。目撃談の前後が大切だ。単なる幻覚なのか？いや単なる幻覚のはずだ、いや単なる幻覚でなければならぬのだ！

看護記録を丹念に読むことにした。目撃談の前後を中心に……。すると目撃談の記録の前にこう記載がある。

『午前三時、患者の血圧低下。触診にて80。意識状態も悪し。鶴見Drの診察を仰ぐ。鶴見Dr診察後……』

鶴見はこの記載部分を読むと、愕然として、ため息をついた。

「何てことだ、俺が回診したその直後じゃないか……」

これは一体どう解釈すればいいんだ？

そう言えば……。

先の老人の目撃談も、自分が回診したその夜に記録されている。二回とも……。そして、今回のこの発見……。

鶴見は困惑した。

「ともかく、別のカルテも見てみよう……。なに、所詮は幻覚のなせる業だ。俺には何の関わりもあるはずが無いんだから……」

鶴見は調査を再開した。

しかし、さらなる調査、分析の結果は鶴見のそんな期待を見事に裏切ってしまった。

半日が過ぎただろうか、彼は二例目の目撃談を発見した。それはやはり看護記録にあった。

鶴見はそれに目を通したとき、「まさか！なぜ？」と思わず自問してしまった。

なぜなら、それも自分の受け持ち患者だったのだ！しかも自分の回診の直後に患者が死神を目撃している。

「これは一体どういうことだ！」

思わず口走ると、鶴見は頭を抱え込んだ。看護記録の二例の記述は、いずれも自分が主治医であり、しかも自分の回診の直後の出来事であるという事実は、単なる幻覚、偶然の一致として片付けるには余りにも不利であった。

幻覚だとしてもなぜ、よりによってそれが自分の患者なのだ？彼の頭脳は、正体不明の敵を相手に戦いを挑むはめになってしまった現実を、どう受け止めていいか分からず混乱に陥った。

なぜ自分の患者が？

彼は自問しながら椅子から立ち上がった。精神的には混乱もし、またかなり肉体的にも疲れていて、もうこれ以上調査を続ける気力が湧かなかった。

「先生、大丈夫ですか？」

鶴見の様子がおかしいことに気付いた司書が声をかけたが、それに答えることも無く、鶴見は茫然自失の状態で部屋を出ると、薄暗い廊下の先へと消えていった。

ある写真

ある写真

この数日に渡る死神の正体探しで、鶴見の頭は混乱の極みにあった。

もう何も考えたくない。

鶴見は死神の件について思考を停止することにした。また、実際それどころではない状況でもあった。老人の容態が油断ならない状況に陥っていたからである。

気管切開後も超低空飛行から抜け出せない状況が続いていたが、もはや墜落寸前の状態に近かった。

「一度家族を呼んでおこうか」

血圧も低下、血液ガスの結果も悪化、尿量も低下、といよいよもう数日持つか持たないかという状況となったある日の夕方、鶴見は詰め所の看護師に声をかけた。まだ若い看護師はすると鶴見にこう返答した。

「先生、この方ね。一人暮らしで身寄りがないらしいですよ。万一の連絡先は確か……」

そう言いながら、その看護師はカルテの看護記録にある、患者情報のパージを捲った。

「はい、はい、えーっと。あ、先生これは駄目だわ。遠い親戚が一人で、それも北海道ですよ」

最近は一人暮らしの老人が多い。彼らは孤独で、寂しさに耐えながら、かつ病気、さらにいは死の不安とも闘っている。何とも可哀想だ。鶴見はこの仕事をしていて、そのことは肌で感じていた。

その時だった。一枚の写真がカルテ用紙の隙間から床にひらりと舞い落ちた。鶴見は反射的にその写真を拾ったが、拾い上げた写真を見ると、彼は思わず驚愕の声を上げた。

「これは……」

写真には二人の人物が写っていた。一人は年配の男性、そしてもう一人は若い女性であった。その彼女は真っ青なワンピースを着てにこやかな笑顔をカメラのレンズに向けている。

「これはもしかしてあの女性？」

鶴見は東福寺で出会ったあの謎の女性を思い起こしていた。写真はカラーではあるものの古ぼけていて、かつインスタントカメラで写したためか写りも鮮明でない。

それに、東福寺で出会った女性の記憶そのものが今や鮮明では無くなっていった。それでも目を凝らして良く見れば見るほど、あの時の女性に似て見えた。

「これは何の写真だい？」

鶴見は写真を示しながら、傍らの看護婦に尋ねた。

看護婦は写真を覗き込みながら答えた。

「あー、その写真。おそらくあの患者さんのものだと思うんですけど……」

「思っんですけど？」

鶴見のさらなる問いかけに看護婦は言葉を続けた。

「ええ、あの患者さんのベッドサイドワゴンの入れ替えをする時にどこからか出て来たんですよ。写っている人は多分あの御老人じゃないかって、みんな噂はしているんですけど……」

そう言われれば、あの老人の五十代位の姿にも見える。スーツを身に纏って背筋をぴんと伸ばし、堂々たる紳士姿である。よく見れば見るほど、なるほど間違いなく老人の若い頃の写真であろう、と鶴見も思った。

「ただ、不思議なんですよ。その背景が……」

そう言われて写真を良く見てみると、何と背景は病院の屋上であった。鶴見は一時期昼休みを屋上で過ごすことも多かったのですが、にそれと分かった。鶴見は驚いた。そして同時に混乱もした。

一体これはどういうことだろうか？

青いワンピースの女性に関しても、一体老人とどういう関係の人なんだろう？ 鶴見は写真の女性が先日の東福寺の女性とがどうしても頭の中で重なってしまった。

しかし、そんなはずはない。鶴見はすぐに自分の考えを否定した。何故なら、写真は老人の年齢から考えて十数年前のものということになるのか？ であれば、先日の女性と、この写真の女性が同一人物のはずが無い。どう見ても同じ位の年齢にしか見えないのだ。同一人物ならそんなことはありえない。

「他人の空似か……」

鶴見はそう呟くと、写真を机の上に置いた。そして写真の紳士に思いを馳せた。

これがあの老人だとしたら、なぜ、彼が屋上に？
机に置いた写真を再び手に取ると、鶴見はまじまじとそれを見続けた。

彼は紳士、女性と交互にその表情を見比べた。紳士、あの老人は実に厳しい表情をしている。しかし良く見ると悲しげにも見える。

そして女性は……。女性は対照的に、心の底から私は楽しいのよ、と言わんばかりの笑顔を振りまいているように見える。

このコントラストは一体何なんだ？

鶴見は目を閉じてしばらく黙想した。病院の屋上には彼自身も様々な思い出がある。そこは図書室の次に彼が好きな空間であった。勤務が始まって間もない頃は、文字通り一日病院に縛られていたから、東福寺まで散歩などままならなかった。そんな彼にとつて、そこは休息の場として欠かせない所であった。しかしそこでの彼は常に孤独だった。

俺もきつというも彼と同じこんな顔をして座っていたんだな。ため息混じりに過ごす暫しの時、彼は孤独と寂しさに耐えながらこの屋上から周囲の景色を眺めていた。そんなことに思いを馳せて、再び黙想に入ると、彼の脳裏では、老人の姿と自分の姿とが交互に現れては消え、また時に重なり、また入れ替わり、老人の見える

ものを自分が見ているような、また自分が見ているものが老人が実は見ているのだ、というような不思議な感覚が渦巻き始めた。

すると、突然であるが、彼は今までは感じたことのない特別な感情が自分の心に湧き上がってくるのを感じた。何と言うのだろう、それは同情という言葉でもない、共感、思いやり、などといった言葉でもない。そんなありふれた言葉ではない、何か特別な感情が……。老人と自分を繋げる何か特別な感情が……。老人の人生に自分が入り込んで行かねばならないのだ、という一種使命感にも似た感情が……。

彼は目を開けると立ち上がった。

「ちよつとごめん、すぐ戻るから……」

看護婦は詰め所を去ろうとする彼に言葉を投げかけた。

「先生、ポケベル忘れないでね」

「わかつているよ」

こう答えながら、鶴見は死神探求調査の件で落ち込んでいた気分が、なぜか写真を見た後の今、少し軽くなったような気持ちになっているのを自分でも驚きもした。と同時に自分が向かおうとしているところが、実は自分自身が向かおうとしているのではなく、何かに引き寄せられているような、そんな不思議な感覚に取り付かれながら、詰め所を後にした。

そこへ……。

しばらくして、巡回に出ていた別の年配の看護婦が詰め所に戻ってきた。

「あら、先生どこに行っちゃったの？指示が欲しかったのに……」

彼女は鶴見が詰め所にいないのを見て、同僚の若い看護婦に尋ねた。

「さあ、今写真を見ていたんですが……」

「写真？」

「ええ」

と言って、差し出された写真を見てその看護婦は驚いてこう言っ

た。

「あら、これ！この女の人！」

そう言いながら写真を手に取った彼女の表情は硬く凍りついたかのようだった。

「え、ご存知なんですか？」

もう一人の看護婦が尋ねた。

「うーん。この人、この病院で自殺した患者さんじゃない？」

その看護婦はしばらく写真を手にとってまじまじと見つめていたが、同僚に写真を手渡して返すと首を縦に振りながら、こうきっぱりと言った。

「間違いないわよ。この青いワンピース、彼女のトレードマークだったからね。衣装が派手な人だったのよ。間違いない。十数年前よ。私が新人だったころ。地下の顕微鏡室で首吊り自殺をしたのよ……」

「自殺？いやだ！そうなんですか！？」

同僚の看護婦も驚きを共にした。

「この病院にも昔、精神科の病棟があったのよ。開放病棟だけだったけど。そこへ入院していたの……。それにしても、その人と、この老人と……。親戚？知り合い？まさか親子？」

「さあ……」

「結局、自殺事件が原因で、開放病棟は閉鎖されちゃった、って訳

……」

「そうだったんだ……」

そんな会話が詰め所で交わされていることは露も知らず、一方、鶴見は何かに導かれるかのように、黙々と病院の階段を上っていた。

屋上での出来事

屋上での出来事

彼が向かったのは屋上だった。先ほどの写真の背景となった場所である。

外はもう薄暗くなっていた。十二月である。日の暮れはあっという間だった。窓から見える景色ももの悲しげで、寒々としており、まさに最近の鶴見の心を反映しているかのようだった。しかし不思議と彼の足取りはしっかりとしていた。

行かねばならない

不思議な使命感にも似た気持ちだった。運命とまで言うと言いすぎであろうか？

まさに操られるように、気がつくとは彼は病院の屋上に立っていた。日没寸前であった。はるか向こうの西山に太陽が沈みかけている。美しい夕焼けの光景が眼前に広がっていた。京都の町が夕日に照らされてまことに美しかった。

彼は、その美しい夕日に、今、百万もの人が照らされていることを目の当りにして、何とも感慨深げになった。

すると彼は不思議な思いに囚われた。その百万の人々の人生に思いを馳せている自分に気がついたからだ。

景色を美しく思うことは常であつたが……。

他人の人生に思いを馳せるとは……。

「俺らしくないな……」

それでも鶴見は思い出した。いつだったか似たような感慨に囚われたことがある。それは彼が学生時代、真如堂に行った時のことである。

彼は真如堂から黒谷さん（金戒光明寺）に抜ける墓苑の道を歩いていた。黒谷さんに抜ける近道だからと思つたからだ、何ともタ刻歩くにはあまりふさわしくないな、と思つたものの後の祭りだっ

た。足早に歩いていくと、ようやく運慶作とされる文殊菩薩が安置されている三重の塔のあるところまで来た。あとはその正面の一直線の階段を下りるだけである。

すると、どうであろう。目の前に何とも美しい夕日に照らされた京都の町並みが広がっていた。彼はあまりの美しさに固唾を呑んだ。自身も夕日に照らされている。そして周りに聳え立つ墓碑も……。

その瞬間彼は考えた。

遠く平安の時代から、京に住む人はこの夕陽を眺めてきた。当時の彼らはこの光をどんな思いで眺めていたのであるのか？西方浄土から照らされる光としてありがたく拝んでいたのであるのか？

そしてこの墓苑に眠る人たちは果たして西方浄土の彼方で見事に蓮の花を咲かせているのだろうか？

今、この病院の屋上でその時と同じような、自分らしくない思いに囚われている。

元来自分は人間嫌いであるのに……。

そんな他人の人生などどうでもいいではないか……。

しかし、黒谷さんの墓苑でも、多くの墓碑に刻まれた人々の人生を見ると……。無関心にはなりきれなかった。

数多く並ぶ墓碑にはその人の人生が刻まれている。戦死した人はその場所も詳しく刻まれている。歩いていると次から次へと戦死した人の墓碑が目の前に現れてくる。

はるか日本を離れて見ず知らずの遠い戦地で死んだ人がいかに多いことか！

鶴見は自分がいかに戦争なるものを、本の知識でしか理解していなかったかをその時いやというほど思い知らされたものだ。

喜んで死んでいった人なんているはずがない

残された人たちの悲しみはいかほどのものであつたろうか？

義憤に近い感情が湧き上がり、何とも切ない気持ちにもなったことを覚えている。

そして今……。

この夕陽を目にして、その時の感慨を思い起こした。そして思った。

あの老人はこの夕焼けを見て何を思っただろうか？

あの老人の人生の中で、あの写真は、あの女性は、あの夕焼けは、この病院は一体どんな意味を持っていたのだろうか？

彼はそんなことを思いながら西山を眺めていたが、暫くすると彼のそんな感慨を消し去るかのようには夕日は完全に西山の向こうに姿を消すと、周りはあっという間に暗くなった。

「戻るとするか……」

鶴見は屋上から建物内に戻るべく、階段の出入り口に向かった。ドアを開けて建物の中に戻ると暖かく、冷えた体に心地よかった。一息つくとき、彼は階段を下りようとしたが、何か心残りのような気がして、ふと出入り口のガラス戸の方を振り向いたその瞬間であった。

「？」

ガラス窓から外が見える。そこに一瞬女性の姿が見えた気がした。しかも青いワンピース姿の……。

鶴見はさらにドアに近づいた。よく目を凝らしてみたが女性の姿は発見できなかった。

「錯覚か……」

何度も確認したが、やはり女性の姿など見えない。

「どうも俺はあの女性に取り付かれているみたいだな……」

ただそこにはすっかり暗くなった外の景色が広がるばかりだった。するとなぜだろうか。突然彼は何か怖い思いに急に駆られた。そしてそのまま二・三步後ずさりをした。

外の景色を眺めていたものの、ガラス戸には彼の姿がぼんやり映し出されているのも同時に目に入る。

その瞬間であった。彼の表情は凍りついた。

「これは……」

彼は絶句した。暗闇を背景に、そこには自分の白衣姿が映し出されている。白衣の白い陰影が、外に広がる暗闇の景気の中にくつきりと浮き上がって、それは何とも不気味な姿にも見えた。

「……」
言葉を失ったまま、彼は再びガラス戸に近づいた。ガラス戸が目の前のところまで来ると、そこには目の前に大きく自分の顔が映し出されている。

「……」

やせ細った顔、くぼんだ目……。

ストレスに打ち負かされて、しかも臨床医として生きる自信を完全に失っていた、自分の打ちひしがれた顔がそこにあった。

彼は思わず顔に手を当てた。しばらくそうしてまじまじと自分の顔を注視していた。

そうしてじつと動かないまま、どれだけの時間が過ぎたであろう

……。

彼は突然声を上げて笑い出した。

「あはははは」

するとさらにそのまま後ずさりして、通路の壁にもたれかかってうな垂れた。そして自らの頭を両手で叩きながら、

「ははは……」

と笑い続けた。

事情を知らぬ人がそこに居合わせたなら、その笑い声はさぞかし不気味に聞こえたであろう。あるいは、それは何とも自虐的な笑いに聞こえたかもしれない。

しばらくして鶴見の笑い声は止んだ。彼は俯いたままその場で微動だにしなかった。

そしてしばらくして……。

「そういうことだったか……」

鶴見はそうぽつりと言いつつ放った。そして大きくため息をついた。彼は依然として俯いたままじつと足元を眺めていた。

死神伝説に振り回されてきた彼の脳裏には様々な思いが交錯して混乱していた。しかしその混乱の糸は、今ようやくほぐれて真つ直ぐとなりつつあった。そして彼には今まで見えていなかった一つの事実がはつきりと自分で認識できるようになった。

彼はふたたび頭を手で小突き回し始めた。そして、天井を仰ぎ見た。そして再び大きいため息をついた。今度はそれは幾分か安堵のため息のようにも聞こえた。

「そういうことだったか、何て俺は馬鹿だったんだ……」

一人呟きながらしばらく腕を組んで、じつとそのままでいた鶴見だが、きつと顔をガラス戸に向けると、次には病棟の方へ体を反転させると、来た道を引き返し始めた。

その表情は、つい先ほどまでの動揺したものではなかった。もし通り過ぎる人がいたら、劣等研修医の鶴見とは誰も思わなかったであろう。まるで別人のような表情……。それほど自信と決意に満ちあふれたものであった。

彼自身が、五月からこの病院に勤務して、これほど力に溢れた自分を感じたことは無かった。それは鶴見にとっても不思議な気持ちだった。

彼は足取りも力強く、老人のいる病棟へ戻ると詰め所に入った。

「先生！」

看護師の岩見が、鶴見を見て驚いた。彼女は夜勤でつい先ほど、看護業務に入ったところであった。

「先生、どうしたんですか？コールしてませんよ」

病棟ぎらいの鶴見で通っていたから、岩見のみならず、ほかの看護師も一様に驚いた表情で彼を迎えた。詰め所から呼ばない限り、簡単には病棟に足を向ける先生ではないことは周知の事実であった。鶴見は、そんな彼女たちの反応をよそに、老人のカルテをカルテ棚から取り出すと、それを小脇に抱えて詰め所を飛び出した。

「先生！どこへ行くんですか？」

不審な行動に岩見は鶴見の後をつけた。見ると、彼は老人の病室

に入って行く。

「先生、待って！」

岩見も病室に入った。すると鶴見が老人の傍らに立ちすくんでいる。

「先生……」

岩見がそこに発見したのはいつもの逃げ腰の、弱弱しい雰囲気
の鶴見ではなかった。

力強く、険しい表情で老人を見下ろす鶴見は、まったく別人に見えた。そんな彼を間近に見て、岩見は何かしら、そこに不思議な魂の再生を発見したような気分だった。

岩見にはすぐに直感で分かった。鶴見が並々ならぬ決意で、この老人の病氣と戦おうとしているのを……。

岩見は鶴見の傍らに來ると、彼に声をかけた。それは、そんな魂の再生に魅せられた彼女の心が、彼女の口を自然に開かせて発せられた言葉であつた……。

「先生、今日はおじいちゃんのために一緒に頑張ろうか！」

鶴見はそれには直接答えなかったが、代わりに岩見の方を振り返ると、にこつと笑って大きく頷いた。

死神との決別

死神との決別

その日の晩、彼は夜通し老人の病室にいた。自らの食事も運ばせて、ベッドサイドで食べた。消灯時間が過ぎても病室を離れなかった。最後にはサイドテーブルに頭を載せて、うつらうつらと眠ってしまった。

「一体先生どうしたの？」

「絶対変よ、こんなこと考えられない」

「何か変なものが乗り移ったんじゃない？」

「まさか、要するにおかしくなった？」

同僚の看護師が岩見に尋ねたが、岩見も確かな理由を知っていたわけではない。魂の再生が云々などという話をして同僚は混乱するだけだろう。

「さあ、私にも何が何やら……」

と答えるだけにしておいた。

「私、毛布を持っていくわ。あんなままで寝てしまったら風邪を引いちゃう」

岩見はそう言うと、詰め所の看護師の仮眠室から毛布を取り出すと、鶴見のところに運んだ。そして、彼の背中から毛布をそっとかけた。

「先生、本当に何があつたの？」

そう心で問いかけながら、岩見は暫し鶴見の背中を眺めていた。薄暗い証明に照らされて、部屋のものすべてが物悲しく映し出されていた。この部屋で今までに一体どれだけ多くの人が命を落としたことだろう？ それらの人の恨みつらみが部屋に染み付いているのだ！

死神だなんて茶化していた自分が恥ずかしい。

岩見は鶴見の背中を眺めながら自分を恥じた。長く仕事をしてい

ると、いつしか最初の純粋な気持ちを忘れてしまい、日常の仕事に慣らされてしまった自分に気がつかないでいた。

死んだ人のそれぞれの思いが詰められた部屋、その人たちの無念な思い、その人たちの語りたかったこと、伝えたかったこと……、それらすべてのことへ一体どれだけの注意を自分は払ってきたことだろう。

岩見は視線を薄暗闇に浮かぶ心電図モニターの波形に移した。そしてその波形を見ながら、この老人の人生に思いを馳せた。そして思った。

この波形に実にこの老人の人生が凝縮されている。そして、今の人は精一杯生きようと戦っているのだと……。

と、その時であった。

「ブーーーーー！」

と言う音が病室に鳴り響いた。老人の心電図のモニターが警告音を発したのだ。

岩見はふっと我に返った。

「心停止よ！」

反射的に彼女は叫んだ。老人の心臓が停止したのである。岩見の動きはてきぱきとしていた。体が患者急変の場合の手順をすべて覚えていた。

「先生！」

と岩見が鶴見を起こすまでも無く、すでに鶴見もその音に飛び起きていた。彼は心電図モニターが一直線になって心臓が停止しているのを確認すると、すぐに叫んだ。

「心臓マッサージだ！」

そして、彼は叫ぶと同時にベッドの上に飛び乗っていた。

「はい！」

岩見はすぐに救急カートをベッドサイドまで運んできた。

「頼む！死ぬな！」

鶴見の心臓マッサージが続いた。岩も傍らで救急薬剤を取り揃え

るなど必死の介助を見せた。

「もうこれ以上は死なせない！絶対に死なせない！」

鶴見は半ば叫びながら必死にマッサージを続けた。

「頼むから死なないでくれ！」

鶴見の指示に岩見はすばやく反応した。見事なコンビネーションで救急蘇生は黙々と続けられた。

そんな必死の努力が実った……。

マッサージ開始後二・三分の後であった。

「プツ、プツ……」

という規則正しい電子音がモニターから発せられてきた。

「やった、先生！心拍再開してます！」

岩見が叫んだ。鶴見はそれが確かであることを自らの目でモニターを見て確認すると、ベッドから降りた。

岩見が鶴見の背中を叩いた。

「先生やったね！最高！」

鶴見は笑顔でそれに答えたが、すぐに老人の方を振り返ると、そのまま、またベッドの横の椅子に座った。そして、突然老人の手を握り締めた。

「先生……」

普段見られない鶴見の行動であったから、他の看護師たちは不審気にそれを眺めていたが、岩見だけは何かしら心でそれを理解出来ていた。

鶴見はその場を離れることなく、老人の手を握ったままでいた。

無言のまま……。表情は険しく、人を寄せ付けない雰囲気だった。

「みんな、先生このままそっとしておこう……」

岩見はそう小さい声で言うと、ほかの看護師たちに退室を促した。岩見だけは部屋に残って老人の容態をもう一度チェックした。

「先生、バイタルも安定しています。持ち直しましたね」

岩見の病状報告にも答えず、鶴見はじっと老人の手を握り締めたままだった。

岩見は、そんな鶴見の背中から再び毛布をかけると、もう一度

「先生、頑張ろうね。私も頑張るから」

と言うと、鶴見の背中をさすった。

「私も先生のそばにずっといるからね！」

そんな岩見の励ましに、それまで微動だにしなかった鶴見がようやく体を動かした。彼は振り返ると、微笑みながら岩見に返答した。
「ありがとう……」

鶴見自身も実は今までに感じたことの無い充実感で胸が張り裂けそうな気持ちであった。

それは医者になって始めて感じた心の底からの充足感であった。今までは死と向き合った患者を前にして、自分は一体何をすべきか、何と戦うのか、結局はつきりわからないままに右往左往していた。患者の苦しみをもたらすものと戦うのだということは分かっている。簡単なことだ、戦う相手は病気ではないか？単純に考えればそうだ。しかし、いつもそう言い聞かせて臨終の場に立ち会って、精一杯病気と戦ってきた。しかしそれでも、実際は自信を持って死にゆく患者の顔を直視できない自分がいた。

渾身の力を込めて戦ったのであれば自分は堂々と、死に面した患者を見送ることが出来るはずだ。でも実際は出来ない自分がいた。

なぜだ？なぜ、いつも自分はおどしているのだ？自信が持てないでいるんだ？

それが分からず悶々とし続けてきた。

臨床医を辞めようとも思った……。

でも、死神伝説とあの老人の写真がすべてを明らかにしてくれた。本当の敵は自分の心の中に巣くっていた”死神”であった。その正体は、病気と闘う人を前に、その人の悲しみ、つらさ、弱気、怒り、嘆き、絶望、それらありとあらゆる弱者の感情に目を背けていた醜い自分のずるい心であった。

病と闘う人と心を共にしないでどうして病に打ち勝つことが出来

よう！そんな単純なことに気がつくのに半年以上を費やしてしまった。そして、死と戦う人につらい思いをさせてしまった……。

自分は医師として失格であったと心から反省すると共に、だからこそ、だからこそやり直す意欲に今や全身が満ち溢れていた。

俺は、この心の闇をすべて打ち砕かねばならない！

もう死神なんかには負けてなるものか！

鶴見は自分の心の闇に潜んでいた”死神”という名の敵に改めて宣戦布告をすると、老人の手をさらに強く握り締めた。

油断は出来ない、隙をみせればすぐにあいつはまたやってくる！

でも、もう俺はあいつの自由なんかにはさせない！絶対に！そしてそのためには、俺はただひたすらこの老人と心を一つにして共に頑張るしかないんだ！

鶴見はかつて味わったことの無い使命感を感じながら、その夜は老人の傍らで結局一晩を過ごした。

死からの蘇生

死からの蘇生

「先生！起きて下さい！」

岩見の声に、鶴見ははっと目を覚ました。目を開くと病室の窓から差し込む朝の光が眩しかった。

「もう朝か……」

朝の病室は昨夜とは打って変わった爽やかな空気に満ち溢れていた。心電図のモニターの音も昨晚とは違い、鶴見の耳に心地よげに聞こえた。

鶴見は大きく背筋を伸ばすと、岩見に問いかけた。

「寝てしまつてごめん。どう？バイタル落ち着いてる？」

岩見はにこつと微笑むと鶴見に答えた。

「えへへ、先生奇跡が起きましたよ！」

「奇跡？」

鶴見には奇跡と言うのが何の意味か分からず怪訝な面持ちでいると、

「先生、血圧が上昇して、尿量も増えてるんですよ！」

と、岩見が興奮して報告を続けた。

「そうか……」

鶴見は深夜の心臓マッサージの後は、眠ってしまったので気がつかなかつたが、なるほど、見ると、老人の顔からは浮腫みも若干引いて、また顔色も改善していた。

「先生やったね！心臓マッサージの後、なんか、どんどん良くなつてるんですよ、本当に」

興奮冷めやらぬ岩見を横目に、鶴見は彼女の報告を聞き終えたと、簡単に老人の診察を済ませた。

確かに状態は改善している。呼びかけに対して若干反応を示したり、さらには、驚くべきことに自発呼吸も出てきている。

「これだと、人工呼吸器の微調整が必要だな……」

鶴見はさっそく調整にとりかかった。老人の自発呼吸のタイミングを計りながらの調整である。これまでの鶴見なら、そんな仕事もどこかやらされているのだ、という感覚が強かった。しかし、今日はなぜかそんな仕事に没頭できる自分がいた。

「これでどうだ！三十分後に血液ガスね、岩見君いいね！」

調整後の指示を確認すると、鶴見はさすがにどっと疲労感に襲われた。

「やるだけのことはやったな。いったん詰め所へ撤退するか……」

鶴見の言葉に、岩見も大きくうなずいた。

「そうよ、先生、少し休まなきゃ」

二人は連れ立って詰め所へ戻った。

詰め所で椅子に腰掛けると、鶴見はさらなる疲労感と眠気に襲われ大きいあくびをした。

「先生、コーヒー入れようか」

と、それを見た岩見が言葉をかけたが、これはもう限界だ、と感じた鶴見は岩見に微笑みながらこう言った。

「ごめん、うれしいけど、本当疲れた。少し家で休憩するよ。」

当直が続いたから部長も午前中休ませてくれるだろう、部長からOKもらったら帰る」

と告げると、立ち上がった。

「そう、先生、本当頑張ったね。ゆっくり休んでくださいね」

岩見も、鶴見のそんな状態を察してあえてそれ以上引き止めなかった。無論、彼女の本心としてはもう少し鶴見と二人きり話が出来れば、と思っていたに違いないが……。

一方鶴見は、「本当疲れた」と言った通り、肉体的には疲れていたが精神的にはむしろ今までにない開放感を味わっていた。

それは、己の内に潜む敵に対して勝利した者しか味わえない最高の充足感だった。

「あの写真が俺を導いてくれた……」

鶴見は昨晚のことを思い起こしていた。そしてこうも思った。

「あの女性も俺を導いてくれたのかな？」

彼の脳裏に、屋上で見た女性の姿がふたたび浮かび上がった。それは目の錯覚であつたに違いない。女性が屋上にいたはずはないのだ。それは分かっているが、それにしても、何らかの不思議な力が彼を導いて、死神伝説の謎解きを彼にさせるに至つたことを、彼は何とはなしに感じ、理解していた。

幻でもなんでもいい。幻なら幻で、それを見たことに意味があるんだ。

鶴見はそう考えると、小さい頃自分の見た、色々な正体不明の人間の幻影が、ひよつとして自分に何かを語りかけていたのではないかと、そんなことへも思いを馳せた。

彼は久々に味わう達成感と、解放感、また心地よい気分を満たされて、足取りも軽く、自分のアパートに向かった。

新たな出発

新たな出発

「さあ、俺は寝るぞ！」

と気合を入れてベッドに入ったものの、鶴見は結局は2時間ほどで目が覚めてしまった。それは思いがけない体験をしたために精神が興奮していたためであつたろう……。それは自分でも分かつていた。

「寝られないんなら、横になつていても意味が無いな……」

彼は身支度をするのアパートを出た。途中スーパーに寄ると、軽食を買つて、東福寺に向かった。

午後からの出勤までの間、しばし「わが心の故郷」東福寺でゆっくりしようと思つたのである。

紅葉のシーズンも終わつて観光客は激減していたが、それでも「晩秋の古都めぐり」とやらのツアーだろうか。ぱらぱらとツアー客がそぞろ歩いている。

彼はいつものお気に入りの場所に腰を据えると、昼食を取り始めた。

「本当にうまい！」

いつものパン屋のいつものパンなのだが、鶴見には今までに味わつたことの無い最高の味にも思えた。

そうして三門を見据えて座りながら、昨晚自分の身に降りかかった不思議な体験を思い起こしていると、ふと、再びあの女性に会えないものか？という思いにとらわれた。実は、今までにも、そんな思いがああ女性と出会つてからというもの、東福寺へ行く度その都度、鶴見の心に湧き上がつていたのであつた。

それほど彼にとって、忘れられない存在の女性であつた。

鶴見は、周囲をざっと見回してみた。しかし、あの女性の姿は見えない。考えれば当然である。通りすがりの観光客に違い

ない。であれば、再開など出来ようはずもあるまい。

それは分かっているのだが……。

「まあ、再会なんて無理だよな、やっぱり……」

すると、次には昨晚の写真の女性のことが思い起こされた。

さらに、続いて、先日あの恐ろしい夢のことも脳裏に浮かび上がってきた……。

そもそも昨日、屋上へのドアのガラス窓越しに見たあの女性の姿は幻なんだろうか？

鶴見は、しかしそこまで考えると、その女性に関する詮索を停止した。

あの女性が現実のものであれ、幻であれ、それは今や彼にとって大きい意味を持たなかったからである。

重要なことは、自分の脳裏に刻み込まれたあの女性のイメージこそが結果的には、自分の抱いた不安と疑問に対してのすべての答えを教えてくれたということだった。そう彼女こそが、得体の知れぬ恐怖から逃げようとする自分を押し留め、さらには死神の正体を鶴見に教え、さらには死神に打ち勝つ勇気を彼に与えたのであった。

「夢にまで出てきて、この情けない哀れな俺を脅かして叱ってくれたっていうことなんだろうな……」

鶴見は、あの恐ろしい夢も、今や女性の自分へのメッセージだったのか、と解釈するに至った。

「ならば感謝しないと……」

そんな思いで三門を眺めていると、三門の向こう側で若い女性はこちらに大きく手を振っているのが目に飛び込んだ。誰かと思って目を凝らしてみると岩見であった。

鶴見は感慨にふけて、心地よい気分であったところを、急に現実世界に引き戻されてしまった。

「岩見君……」

呆気に取られた鶴見であったが、そんなことにはお構いなく、彼女は急ぎ足でどんどん彼に近づいてきた。

「先生！」

岩見は鶴見の前までやってくると、例の愛嬌溢れる笑顔を鶴見に向けた。そしてこう鶴見に告げた。

「当直明けで、私は今から帰るところなの。で、ひょっとして先生と会えるかな？つて。やっぱりここだと思ったんだ。先生、もう私たちで心伝心だね！」

「勝手なことばかり言うな……」

鶴見は苦笑した。彼が登場を願っていたのは、あの、全身に女性らしさを漂よわせた青いワンピースの女性だった。ところが実際現れたのはセーター、ジーンズ、スニーカー姿の地味な女性である。

「ふ〜ん……」

溜息をつく鶴見を尻目に、

「先生、本当はうれしんでしょ！わかってるんだからね、横に座ってもいいよね」

と言うが早いか、彼女は、鶴見が「いいよ」と返事をする間もなく、ちょこんと彼の横に座ってしまった。

それでも昨晚の出来事があつての今日である。

「これ一つ食べる？」

鶴見は残ったパンを岩見に差し出した。

「いいの？先生、ありがとう。ここのパン屋さんのパンって東福寺界限では有名なんだよね」

と、返事すると岩見はパンを食べだした。

「おいしい！」

そんなとりとめのない会話が暫し続いた。

鶴見の心は満たされていた。昨晩に限らず、岩見はずっと自分を支えてくれた。折につけ励ましの言葉をくれた。今まで病院の中で疎外感と孤独感に苛まれてきた彼にとって唯一の支えであったことは紛れも無い事実であった。

彼はそんな感謝の思いを、思い切って彼女に告白することにした。今日はなぜか、自分でも不思議なほど自分の心に素直になれて

いたのである。

彼はおもむろに口を開いた。

「岩見君、なんかうまく言えないけど、本当、今まで、いろんなこと、ありがとうね……」

鶴見は思い切って岩見にそう告げた。

「まあ、何、先生、急にそんな……」

そう答える岩見の顔がほんの少し赤らんだように鶴見には見えた。彼はさらに続けた。

「本当、本当うまく言えないんだけど、君がいたから何かここまでやってこれたんだなあ、ってつくづく思うんだ、本当に……、ありがとうね」

岩見は暫く黙って下を向いたまままでいたが、おもむろに顔を上げると鶴見に向かってこう言った。

「私こそ、先生に感謝しないと……」

鶴見には意外な返事だった。なぜ自分が感謝の対象に？

「え、どうして？」

鶴見は反射的に問い返した。岩見はしばらく黙って俯いていたが、顔を上げると口を開いた。

「私ね、ほら、准看でしょ。先生は分かってるでしょけど、結構病院では辛い立場にあるのよ……」

「だらうな……」

二人の間に、また暫しの沈黙の時が流れた。

岩見がその沈黙を破って言葉を続けた。

「私、辛いときは金沢に帰っちゃおうかな、なんて考えたときもあるの。でもね、ここで負けたら駄目だ！っていつも自分に言い聞かせてきたの……」

いつになく真剣な表情に鶴見はただ黙って聞き続けた。

「でね、そんな時、先生のこと考えるの。先生のことね、悪口言う人が多いんだけど、ほら、患者に冷たいとか、熱心じゃないとかね。でも私ね分かるんだ。先生は孤独なんだって。辛いんだって。でも

先生必死に耐えて頑張ってる、いつも、ずっとね。私には分かるんだ、それが……」

鶴見は、岩見がそんな目で自分を見ていたことに気がつく、驚きもしたが又同時に何かしら恥ずかしい気持ちにもなった。

「だから私、先生のことと思って、私も頑張らないと！ってねいつも自分を励ましていたの。へへへ、私って勝手にしょう……」

最後は照れ笑いでごまかした岩見だが、その目には涙が浮かんでいた。彼女は、あわてて涙をぬぐうとそのまま黙ってまた下を俯いた。

「岩見君……」

鶴見はこんな時にどう言葉をかけたらいいものか、対応が分からずどぎまぎした。後の言葉が見つからずやむなく黙っていた。すると暫くして、岩見が突然下の地面に飛び降りた。そして鶴見のほうへ振り向くと笑顔でこう言った。

「先生、少し散歩しようよ！いい散歩コースがあるんだ。仕事は少し遅れても問題ないでしょう、夜勤明けなんだから」

「えっ？」

突然の提案に鶴見は驚いたが、岩見はそんな鶴見を尻目にさつさと歩き出した。

「ここからね、ちよとしたハイキングコースがあるの。大丈夫！たいた距離じゃないし。すぐなんだよ、伏見稲荷まで行こう！途中ね、小川が流れてたりね、とっても気分がいいんだから」

断る術も無かった。

「分かったよ、ちよと待って」

先に歩き始めていた岩見はすでに三門の前まで達していた。

「まったくせっかちなんだから……」

鶴見も後を追った。勅使門が向こうに見える。岩見はそちらへ向かっていた。

「先生、こっち、こっちよ！」

鶴見も早足で三門へ向かった。山門の前を通り、勅使門の所まで

来ると、彼は妙な爽快感に満たされた。

そこで彼は一瞬歩を止めた。そして三門の方を振り返ると、大きく深呼吸をした。爽快感がさらに体の中に膨らんでくるのを彼は感じた。

それは迷子になった自分が、それを見つけた母親に抱きしめられた感触とも言おうか。自分を包み込んで安心させてくれる感覚……。

いつも自分の愚痴を聞いて来てくれてありがとう。

彼は、内心そう思うと、心底感謝の気持ちを込めて三門にお辞儀をした。

そんな鶴見の心境を岩見は、しかし知るはずも無い。

「先生、何してるのよ。門にお辞儀なんかしちゃって変ね。早く、早く、もう置いて行っちゃうからね」

岩見が急かすので、彼は足早に岩見を追った。

そしていよいよ東福寺の境内を出ようとした時だった。何か後ろ髪を引かれる思いにとらわれ、鶴見はふいと後を振り向いた。

「？」

三門の楼閣部分で何かが動いたような気がした。鶴見は目をこすった。人か？ いやそんなことはありえない、何故なら今は特別公開の時期では無い。三門の楼閣部分は普段は非公開で上には登れないのだ。

「また目の錯覚か？」

目を擦りながら三門に近づこうと、一歩足を運んだその瞬間であった。

「先生、何してるの、遅い！」

岩見が背中を叩いたので、鶴見はびっくりして後ろを振り返った。「いや、その……」

言い訳をしながらも、あわてて再び山門の方を振り返ったが、楼閣部分にはもはや何の姿も確認できなかった。

「おかしいな……」

楼閣の方へ目を凝らしている鶴見を見ながらも、岩見は鶴見の思
いにはお構いなしで、彼の手を取ると陽気に言葉を投げかけた。
「はい、ファンクラブ会長の言うことを聞いて！早くこっちよ、こ
っち」

鶴見は手を引っ張られると、もはや三門への執着を許されようは
ずもなく、岩見に従った。

岩見はそんな鶴見にさらに陽気に語り続けた。

「先生、伏見稲荷にはお稲荷さんがいるんだからね。狐ってとって
も愛嬌があるんだよ……」

狐と聞いて、鶴見は一瞬あの夜の夢のことを思い起こしたが、陽
気な岩見の言動に、すぐにそんな記憶も飛び去ってしまった。

気持ちを切り替えると、彼も陽気に振舞うことに決めた。

「よっし、行こうか。わかったから、そんな引っ張るなよ」

彼も笑顔でこのように岩見に答えた。すると岩見はさらにはしゃ
いでこう言った。

「そうそう、そうでなくっちゃ。でもね、怖いお狐様もいるん
だ。面白いよ、一緒に見よう！」

「怖いね……。それは勘弁してほしいな！」

二人は東福寺境内を出ると、観光客がめつたに通ることのない東
側の堀に沿った道を歩き始めた。

道はずっと坂道になっており、その坂道を登りつめたところから
ハイキングコースが続いているのである……。

かくして二人は伏見稲荷へと向かった……。

狐の待つあの社へ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3148k/>

死からの蘇生

2010年10月8日15時56分発行